

《翻 訳》

ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ
『ナオ船サント・アルベルト号難船記』(1597 年)

— ヴィラ・ヴィソーザ, ブラガンサ家所蔵初版本からの全和訳およびテキスト校訂 —

Tradução integral japonesa do *NAVFRAGIO DA NAO S. ALBERTO, E ITINERARIO DA GENTE, QVE DELLE SE SALVOV* (Lisboa, 1597) da autoria de João Baptista Lavanha

日埜 博司

キーワード

『海難悲話』, ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ, ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラ, ナオ船, 過剰積載, 食欲, カフル人, アンコセ, テーラ・ド・ナタール, ロウレンソ・マルケス, モサンビーク

訳者緒言

ディエゴ・コリヤード編『懺悔録』(ローマ, 1623 年。原文はラテン文字による日本語)のポルトガル語全訳注に引き続き, 2007 年度も, ポルトガル大航海時代にゆかりの史料を, 文献学の手続きを踏みつつ, あるいは日本語へ, あるいはポルトガル語へ直す作業を継続する。具体的に発表を企図しているのは, 次の 2 点である。

ひとつは, 前記『懺悔録』との内容的な関連性が想定される日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』(出版地未詳, 1598 年。原文は漢字かな交じりの日本語で, 流麗な行草体で印刷される)のポルトガル語訳注。キリシタン時代のイエズス会宣教師がキリシタンの懺悔(カトリック用語で正しくは告解)を効率的に引き出すため, 教養ある日本人信徒との協働により編んだ聴罪のためのいわばマニュアルである。

もうひとつは, イスパニア=ポルトガル同君連合時代(1580~1640 年)のハプスブルク王家に主席天文学官(Cosmógrafo-mor)として仕えたポルトガル人ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャによって執筆され 1597 年にアレシャンドゥレ・デ・シケイラの工房(リスボア)で印刷された『ナオ船サント・アルベルト号難船記』(以下『ア号難船記』と略称する)の日本語全訳。今回公にするのはこちらである。

1593 年 1 月 21 日にインドのコーチンを出港しリスボアへ帰航しようとする大型ポルトガル船(ナオまたはナウ)サント・アルベルト号が, 喜望峰周航を目前にして南緯 32 度附近で難破, 上陸に際し死を免れた人々が, ポルトガル人交易地であるロウレンソ・マルケス(現, モサンビーク共和国の首都マプト)へ向け, 約 100 日にわたる行軍を繰り広げる, その模様をラヴァーニャが現場体験者から直接取材して精彩豊かな筆致で描き出すノンフィクションである。初版本には欄外に日記風の日付が印刷してある。

『ア号難船記』は, ポルトガル人書誌学者ベルナルド・ゴメス・デ・ブリットが 1735 年から 36 年にかけて刊行した全 2 巻の編纂書 *História Trágico-Marítima* (『海難悲話』と訳す)に収められる。このテキスト

**N A V F R A G I O
D A N A O S. ALBERTO,
E I T I N E R A R I O D A G E N T E,
Q U E D E L L E S E
S A L V O V.**

**De João Baptista Lava-
nha Cosmographo mór
de Sua Magestade.**

**DEDICADO AO PRINCEPE
D O M P H I L I P P E
N O S S O S E N H O R.**

E M L I S B O A.

**Em cása de Alexandre de Siqueira.
ANNO M. D. XCVII.**

Com Licença, & Privilegio.

『ナオ船サント・アルベルト号難船記』初版本の扉
ブラガンサ家 Casa de Bragança (ヴィラ・ヴィソーザ公爵宮 Paço Ducal de Vila Viçosa) 所蔵

を底本とした翻訳は数年前にあらあら済ませていたのであるが、当時は純粋な初版本にアプローチするチャンスがなく（「純粋な」という形容詞は、初版の体裁を模倣した海賊版が後世に——おそらくは 18 世紀に——出たことを踏まえて用いる）、発表を急ぐ気持ちにはなれなかった。

2004 年度ポルトガルにおける在外研修中、某日を『ア号難船記』初版本の所蔵先であるブラガンサ家

Casa de Bragança (ヴィラ・ヴィソーザ公爵宮 Paço Ducal de Vila Viçosa)を訪ねることに充て、世界に2部のみ伝わる純粋な初版本の1部を実地に手に取る機会に恵まれた。マイクロフィルムの提供を受けて、宿願であった初版本テキストの精査を果たすことができた。

パラグラフごとにわたくしに校訂を施した原文テキストを添えるが、これは、ごく稀に存在するゴメス・デ・ブリット編テキストとの異同を明らかにする必要があるためである。訳者なりに最小限のクリティークを施した初版本テキストを掲げることで、拙訳を批評していただくための便宜はより高まるであろうとも思考する。

今回公にする範囲でもっとも注目に値するのは、16世紀末ポルトガルで海事万般に携わる者へラヴァーニャから浴びせられる辛辣で忌憚のない批判・糾弾であろう。見せかけの「黄金」時代を謳歌し現世の富に執着するポルトガルの海外渡航者たち。彼らのあいだに上下を問わず蔓延する「食欲」の風潮と、それがもたらす常軌を逸した香料など東洋の財貨の過剰積載——特にインドからの復路航海における——。人々が命を託す大型船ナオを建造したり整備したりする側の“手抜き”と、プロフェッショナル意識の欠如……。数多くの著書に加えて『造船工学に関する第一の書』(*Livro Primeiro da Architectura Naval*)¹と題する稿本(おそらくは自筆)を遺したラヴァーニャにとって、上記のような同胞の貪婪・弛緩・頹廢ぶりは看過しうる他人事ではなかったのである。

拙訳がよりよく理解されるよう、また、できうればその興趣をより高めるため、脚注で、幅広い視点からの考察・注釈を試みたい。特に『ア号難船記』には16世紀末東南アフリカ先住民に関する断片的ながらも貴重な民俗誌が含まれる。16世紀末における彼らの民俗誌としては、まず、ドミニコ会宣教師ジョアン・ドス・サントスが1609年にリスボアで刊行した『エティオピア・オリエンタール』という貴重な大著を挙げねばならない。『ア号難船記』を適宜『エティオピア・オリエンタール』に見える関係記事と照合すれば、ラヴァーニャの叙述がどの程度まで正鵠を射たものであるか、逐一裏づけることができるであろう。

ラヴァーニャの書物にはまた、乗船を棄て、上陸した生き残りの乗員一同が隊伍を組み、行軍を重ね、前述のロウレンソ・マルケスを経、ついにはポルトガル根拠地のモサンビークへ回航するまでに嘗めた苦難や、ゆく先々で邂逅した先住民との交流の顛末がつぶさに、ときには劇的に描写される。カフル人²と総称される東南アフリカ先住民に関してラヴァーニャが用いる言葉のはしばしには、無意識の偏見とかレイシズムの感情がちらちらと垣間見える。にもかかわらず、苦難の遍歴を続けるポルトガル人一行に対しカフル人が示す態度や行動は、若干の例外はあるものの、おおむね穏健で抑制的であるのが印象的だ。ときには、信頼と友愛に溢れた、としか評しようのない微笑ましい相互交流が展開される。少なくともラヴァーニャの筆致からは、永いあいだ、同胞を奴隷売買の標的にしてきたポルトガル人に

¹ 造船史研究上、画期的な意義を有すると思われるこの稿本は、マドリード王立歴史アカデミア図書館(Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid)に所蔵される。ポルトガル海事学会(Academia de Marinha)によって1996年に活字化され英語訳を附して一書に編纂されたが、まったくの門外漢である訳者にその本格的考究は不可能である。専門学者による後考を俟つ。

² オランダ人ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテンは大著『東方案内記』の第41章をカフル人に関する詳しい記述に費やしている(岩生成一他訳注、岩波書店、大航海時代叢書VIII、1968年、370～375頁。Cf. Jan Huygen van Linschoten, *Itinerário, Viagem ou Navegação para as Índias Orientais ou Portuguesas*, ed. Arie Pos & Rui Manuel Loureiro, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1997, pp.181-183)。

に対するカフル人の怨念というか憎悪感情は、ほとんど窺うことができない³。

『ア号難船記』は、ブリット編『海難悲話』所収の数ある作品の中でも「おそらくは最良の出来栄であろう」と、『海難悲話』の校訂者アントニオ・セルジォは高く評価する⁴。であればこそ、原文の存在を感じさせぬまでにこなれてはいても、語学的吟味が行き届き、本旨からの逸脱はなるべくゼロに近づけるという、そんな翻訳をめざしたいものである。

常例にのっとり、熟慮と丹精をもって稿を練ったつもりではあるが、頻出する特殊な海事用語の解釈に難渋し、途方に暮れることが少なくなかった。ポルトガル海外殖民史の泰斗チャールズ・ラルフ・ボクサーによる英語訳⁵や、海事用語の小辞典まで附されたアントニオ・セルジォの校訂本を絶えず座右に置いたことは当然として、今回も、航海史・帆船史の専門家杉浦昭典氏（神戸商船大学名誉教授）に関係箇所を査読をお願いした。杉浦氏からはただちに便箋 5 枚にしたためられた貴重な返書を賜った。その御厚意に対し心からの感謝と敬意を捧げる。

今回の掲載は、紙幅の関係により、冒頭から 1593 年 3 月 31 日の記事までとする。

ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』に収められた『ア号難船記』テキストから削除されているのは次の 3 点である。今回、初版本にもとづきこれらも訳すが、②に限り幾つかの疑問が未解決のままであるのでやむなく先送りとする。

- ① 允許状 3 通（宗教裁判所が査閲し印刷許可を与えた旨、認証するもの）
- ② 特許状（国王フェリーペ 2 世〔ポルトガル国王としてはフィリーペ 1 世〕みずからがラヴァーニャの著作権保護を謳ったもの）
- ③ ラヴァーニャからのフェリーペ親王（後、即位してフェリーペ 3 世〔ポルトガル国王としてはフィリーペ 2 世〕）宛て献辞

『ア号難船記』初版本（海賊版も含めて）およびもろもろの校訂本・訳本に関する書誌的考察、原著者ラヴァーニャの略伝、さらに校訂に際しわたくしに定めた若干のルールは、次回以降、訳者解題として記載する。

³ 日本では、豊臣秀吉晩年の 16 世紀末から、徳川家康が天下を掌握した 17 世紀初めにかけて、澎湃として湧き起こった「南蛮ブーム」のもと、いわゆる南蛮屏風が盛んに製作される。大阪・中津の南蛮文化館に所蔵され、近年重要文化財に指定された狩野派の逸品は、数ある南蛮屏風中の白眉とされる。この屏風には、長崎到着後、船内の雑役や、艀の操船や、荷揚げ作業に精出す黒人が幾人も描かれている。彼らこそ、モサンビークなど東南アフリカのポルトガル勢力圏から拉致されてきたカフル人——すなわち『ア号難船記』に登場するバントゥー系先住民たち——であった蓋然性がきわめて高い（ただし、日本人絵師によって描かれた彼らの姿態はと言えば、躍動感に溢れ、表情も決して暗くはない。身なりにしても、素地こそ粗悪であるが、纏う衣裳は基本的にポルトガル人のそれとほぼ同じだ）。

⁴ ‘O presente relato merece talvez ser considerado como sendo o mais bem escrito de toda a colecção.’ (*História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, III, ed. António Sérgio, Lisboa, Editorial Sul, [1956], p.14)

⁵ C. R. Boxer ed., *The Tragic History of the Sea: Narratives of the Shipwrecks of the Portuguese East Indiamen São Thomé (1589), Santo Alberto (1593), São João Baptista (1622), and the Journeys of the Survivors in South East Africa*, The Hakluyt Society, Second Series, CXII, 1959. Kraus Reprint: 1986, Millwood, New York.

翻訳およびテキスト校訂

允許状

我らが君なる国王陛下の主席天文学官ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャの執筆せるナオ船サント・アルベルト号の難破、ならびにそれより一命をとりとめし人々の放浪に関する本報告を余閲読せり。〔そこに〕我らが聖なる信仰に反するがごとき、また、聖なる信仰に由来せる良俗に反するがごとき要素いささかもこれなし。否むしろ、幾多の事項において、インディアの諸地方へ航海せる人々のため、必要にしてよき知見を提供せる作品と認む。よってこれ版に刻むを適切なりと思料す。

フレイ・マノエル・コエーリョ

LICENÇA.

VI este Naufragio da Nao Santo Alberto, & Itinerario da gente que delle se salvou escrito por Ioaõ Baptista Lavanha Cosmographo Mór de ElRey Nosso Señor, não tem cousa que seja contra a nossa Sancta Fé, ou cõtra os bõs costumes della, antes me parece obra necessaria, & que servirá de aviso em muitas cousas aos que navegão as⁶ partes da India, por onde me parece que se pôde imprimir.

Fr. Manoel Coelho.

上掲の報知を一覧し、ナオ船サント・アルベルト号の難破に関する本報告の印刷を許可す。印刷完了後、草稿との照合を行なわんがため、かつ流通の許可を賦与せんがため、〔印刷見本を〕当評議会へ回付すべし。リスボアにおいて。1596年11月7日。

ディオゴ・デ・ソウザ

マルコス・テイシェイラ

Vista a informação podesse imprimir este Naufragio da Nao S. Alberto, & depois de impresso torne a este Cõselho pera se cõferir com o original, & se dar licença pera correr. Em Lisboa 7. de Novembro de 1596.

Diogo de Sousa.

Marcos Teixeira.

上掲せる宗教裁判所の允許状を一覧し、余また通常の権能によりて、ナオ船サント・アルベルト号の行程に関する本報告を印刷すべき許可を与う。リスボアにおいて。〔15〕97年4月17日。

フランシスコ・ラベロー

Vista a licença do S. Officio atraz escrita, doua tambem por autoridade Ordinaria pera se imprimir este Itinerario da Nao S. Alberto, Lisboa 17. de Abril, 97.

Francisco Rabello.

我らが君なる親王殿下へ

わが君よ。

〔15〕93年、ナオ船サント・アルベルト号の難船から一命をとりとめたポルトガル人は、野蛮なるカフル人が棲む広大なる土地を新たに見出した。彼らはその地を歩き抜き、新たな踏破ルートを開拓した。

⁶ 初版本の用字法に従うなら、“ás”(前置詞“a”と女性定冠詞“as”の縮約形。現代ポルトガル語のそれとは異なる)とすべきか。

その結果、思いもかけぬ便宜のかずかずを得て前進を続け、ついにスピリト・サント〔聖霊〕の湾へ到達した。そこは彼らが有する第一の交易港であり、かのカフラリーア地方ではもっとも南に位置する。本報告は、かの地方の沿岸で難船に遭遇するであろう者たちのため（しかしデウスよ、このような難船が起こることを、もう二度とはお許しになりませぬよう）、大きな助けになろうと思われたためであろうか、当王国の為政者たちは私に委託してその難船の記録を作成するよう申し渡したのである。ただ今、親王殿下〔後、即位してフェリーペ3世〕のお手許へ届ける報告こそ、それにほかならぬ。私は目下、国王陛下〔フェリーペ2世〕が有し給う大いなる帝国の全領域（親王殿下は長大なる天寿を全うしつつ、いつの日かそのすべてを継承なさるであろう）の地誌と歴史、さらにはその領域を治めるもろもろの帝王と王侯の系譜に関する一書⁷の執筆を終えつつある。本報告のささやかなることは、これよりもいささか力作かと思われる前掲の書物に免じお赦しいただきたい。その書物は、臣下の身に余る多大の榮譽を——さらに言えば殿下へ献呈されることにより、一段と高められた榮譽を——私に約束するであろう。そうして手に入れた榮譽は、必ずや本報告へ反映してその価値を高めることに貢献するであろう。本報告を一瞥していただければ（それこそわが小さき贈り物へ与えられる最大の見返りである）、股肱の臣が長く困難なインディアへの航海から、いかに危難に満ちた経験を重ねつつあるか、殿下はただちに理解なさるであろう。その過程で彼らは絶えず不信心の輩と戦い、困難へ立ち向かい、ときにはみずからの命を失う。そして多大の流血の果て、ある者は命を永らえ、故国に戻って余生を享受する。しかも勝利の報酬を思うさま手にしながら。しかしその一方で、海に命を奪われる者がいる。彼らがそれを経めぐる豪胆さに海は不興を覚え、そして彼らは海から憤怒の鉄槌を振り下ろされるのだ。そうしてナオは破滅へと追い込まれ、このたびの難船がそうであったように、怒り狂う波濤によって浜へと打ち上げられるのだ。ポルトガル人はしかしすべてに決然と立ち向かい、勇猛さと晴朗さを胸中に秘めつついっさいに対処する。デウスの栄光を高め、陛下と殿下とへ尽くさんと一念あるがゆえにこそ可能なわざである。寛仁の^{おおみこころ}大御心をもって統べられるがゆえに、かくも欣然と、かつ愛着をもって一心随従の念を表明するにふさわしき我らが帝国の幸福さと堅固さ。デウスよ、殿下のため帝国へ末永き繁栄をもたらし給え。さらに願わくは、殿下の命を守り、^{いくとせ}幾年もの天寿を恵み給わんことを。リスボアにて、1597年8月19日識。

AO PRINCIPE N. SENHOR. SENHOR.

DEscobrirão os Portugueses, que se salvarão do Naufragio da Nao S. Alberto no Anno de XCIII. hum grãde espaço da Barbara Cafraria, & por ella romperão, & abrirão nova estrada, pella qual caminhando com cômodidades não esperadas, chegarão á Baya do Spirito Sãcto, primeiro Porto do seu Comercio, & o mais Austral daquella parte. E como a rellação deste caminho seja de muita importãcia, pera aviso dos que naquella Costa se perderem (o que Deos não permita que succeda) encarregarão me os Governadores deste Reyno, que a fizesse. He esta que neste volume vay ás mãos de V. A. em penhor de outro mayor, que vou acabando da Discripção, & Historia, de todos os Stados da Monarchia de S. Magestade (nos quaes soccederá V. A. depois de largos Annos de sua vida) & das Genealogias dos Reys, & Principes delles. Obra que receberá o preço da Grandeza do sojeito, & muito mais de ser

⁷ アントニオ・セルジオはラヴァーニャの著述と考えられる作品を20点以上列举しているが、『地理学要綱』(Compêndio de Geografia)や『イスパニア王室の歴史と系譜』(História e Genealogia da Monarquia Espanhola)がここで言及されているものに相当するか(História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito, III, p.17)。

á V. A. dedicada, donde á esta também se lhe communica. Se nella poser V. A. os olhos (grande premio de tão pequeno presente) verá os perigosos trabalhos, que sofrem estes seus Vassalos, na larga Navegação da India. Onde pelejando continuamente com infieis, arriscão, & perdem as vidas: & quando com muito sangue derramado ficão com ellas, & as vem gozar á sua Patria, com o merecido fruito de suas vittorias, alcançaas delles o Mar, enojado da ousadia com que o passeão, & furioso perde suas Naos, & dá com ellas à Córta, como fez á esta. Porem á tudo os Portugueses contrastão, & por tudo passaõ com animosos, & alegres peitos, pella honra de Deos, & pello serviço de S. Magestade, & de Vossa Alteza.⁸ Felice, & firme Imperio, que com tal clemencia he governado, que merece ser com esta Vontade, & Amor obedecido. Prospere Deos a Vossa Alteza, & a vida goarde, & acrescente muitos Annos. De Lisboa dezanove de Agosto de M. D. XCVII.

Ioão Baptista Lavanha.

ナオ船サント・アルベルト号の難船、およびその難船から生き延びた人々の行程

我らが君なる国王陛下の主席天文学官ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャこれを記す

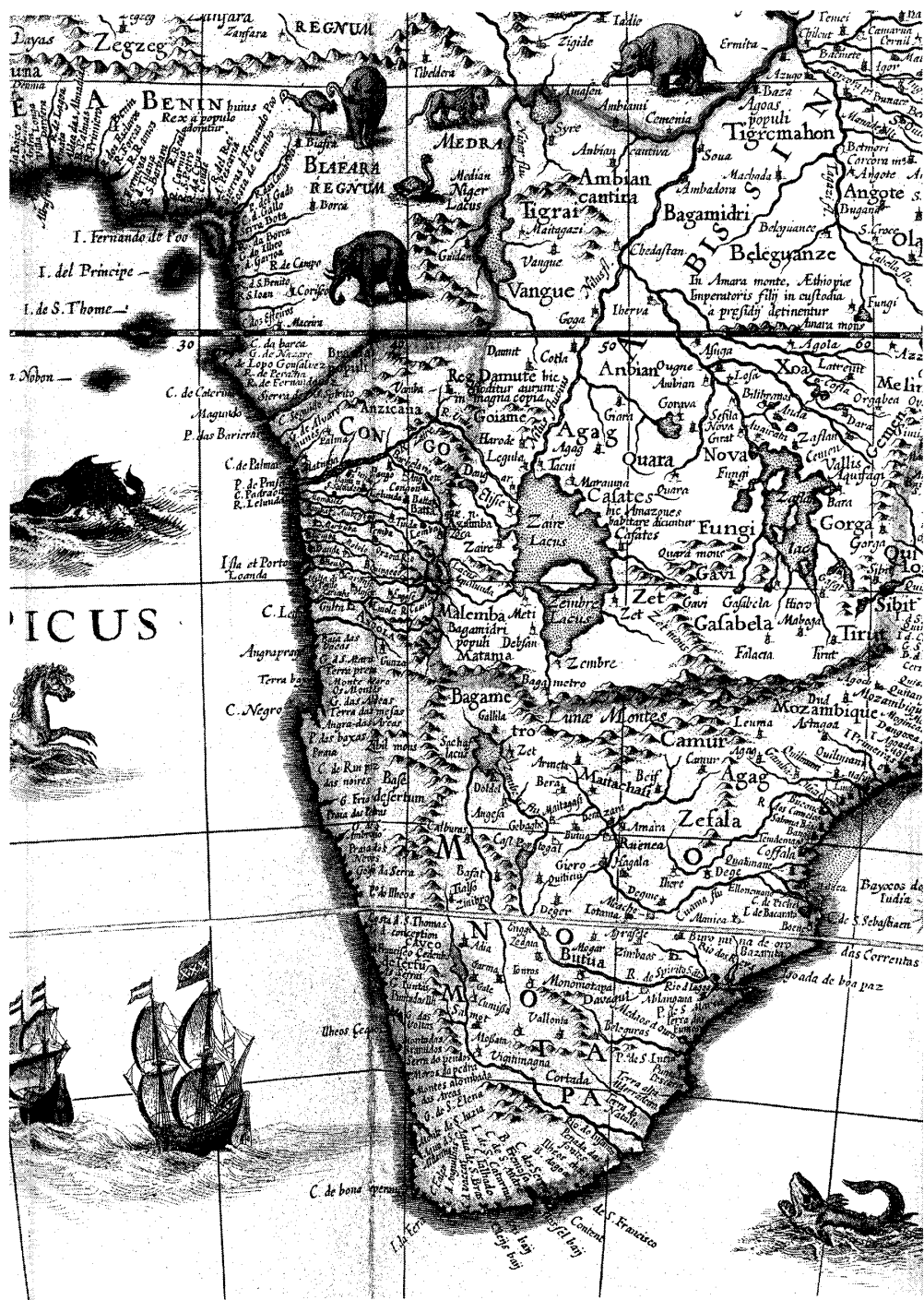
テラ・ド・ナタール⁹の一方の端にあるペネード・ダス・フォンテス¹⁰におけるナオ船サント・アルベルト号難船の消息、それにその難船から命拾いしたポルトガル人が 100 日間にわたり行進を続け、ついにロウレンソ・マルケスの河¹¹——彼らはその地からモサンビークへ向けて船出した——へ至ったこと

⁸ 初版本ではピリオドではなくコンマが打たれる。しかし引き続く“Felice”が大文字であること、さらには構文上の整合性を考慮してピリオドのほうが正しいであろう。

⁹ 原綴り“terra do Natal”。「クリスマスの地」の意。アフリカ東南部の沿岸地方に位置し、現、南アフリカ共和国ナタール州にその名をとどめる。インドへの海路直航ルートを探索するヴァスコ・ダ・ガマの船隊が 1497 年 12 月 25 日にこの地を望見したことになむ。Cf. *Dicionário de História dos Descobrimentos Portugueses*, II, ed. Luís de Albuquerque *et al*, [Lisboa], Caminho, [1994], p.792.

¹⁰ 原綴り“Penedo das Fontes”。「もろもろの泉の岩場」(“Rock of the Springs”)の意。現、南アフリカ共和国、マパカ河 Mapaca River の河口付近、南緯 32 度 02 分、東経 29 度 07 分に“Hole-in-the-Wall”の名で知られる壮大な岩壁があり(写真で見ると、通称のとおり、岩壁の中央に波浪の浸蝕作用によって開いた穴がある。Cf. *Guia American Express: África do Sul*, ed. Michael Brett *et al*, Porto, Livraria Civilização Editora, 2000, p.203)、これがラヴァーニャの記す「ペネード・ダス・フォンテス」であるとする説がある(George McCall Theal, *The Beginning of South African History*, London, 1902, p.296. *Apud*. Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.108, note 1)。問題の地点を、フェルナン・ヴァス・ドウラードが 16 世紀後半に制作した華麗な『アトラス』に求めるなら、“P[onta] (?) da Fomte”という名称で記載される地点こそそれに違いない。Cf. Fernão Vaz Dourado, *Atlas: Reprodução do Códice Iluminado 171 da Biblioteca Nacional*, ed. Luís de Albuquerque *et al*, Lisboa, 1991。ジョアン・ブラウ『アトラス・マイオール』(1665 年)には、より明確に“Penada (sic.) das fontes”という綴りで現われる。Cf. Joan Blaeu, *Atlas Maior 1665: «El Mejor Atlas y el Más Grande Jamás Publicado» «La Raccolta di Carte Più Vasta e Più Elegante Mai Pubblicata» «O Maior e Melhor Atlas Alguma Vez Publicado»*, Köln *et al*, Taschen, s/d.

¹¹ 原語“Rio de Lourenço Marques”。直訳すれば「ロウレンソ・マルケスの河」であるが、実際は、(エ)スピリト・サント〔聖霊〕河が今日のデラゴア湾に注ぐその河口一帯を漠然と指したようである。Cf. *O Lyvro de Plantaforma das*



ペネード・ダス・フォンテス

アフリカ大陸東南端、インファンテ河 Rio do Infante (現、グレート・フィッシュ河) のやや南に “Penada das fontes” と見える。Joan Blaeu, *Atlas Maior* 1665: «El Mejor Atlas y el Más Grande Jamás Publicado» «La Raccolta di Carte Più Vasta e Più Elegante Mai Pubblicata» «O Maior e Melhor Atlas Alguma Vez Publicado», Köln et al, Taschen, s/d. より

Fortalezas da Índia da Biblioteca da Fortaleza de São Julião da Barra, ed. Rui Carita, Lisboa, Ministério da Defesa Nacional / Edições INAPA, 1999, f.49. 現、モザンビーク共和国の首都マプート(ポルトガル植民地時代の旧称ロウレンソ・マルケス)はこの湾の北岸に位置する。

に関する記録は、我らの航海について知るためにも、その航海から緊要度の高い教訓を見出すためにも、いずれ劣らぬ重要性を有する。それはこの難船が次のようなことを教えてくれるからである。すなわち、起こりうべき別の難船に遭遇したとき、航海者はいかに振る舞うべきか、いざ難船に際会したときに講ずべき有益な措置は何か、また心して避けるべき、見せかけばかりで、実は有害な措置とは何か、海上における損害を最小限に食い止め、かつ陸地での行進をより安全ならしめるためいかなる方策を講ずべきか、船を棄てて上陸する際のリスクをいかにすれば最小にしうるか、そしてほかでもない、このナオがなぜ遭難したのか、ということである。というのは、他のほぼすべてのナオが失われる理由も、本船が難破した理由と似たり寄ったりであるからだ。行進の模様を描く叙述を通じて、我らは、いかなる経路を採り、いかなる経路を避けるべきか、道程の途方もない広がりや困難とに対処するため、いかなる心の準備を為しておくべきか、カフル人と交際し意思を通わせるにはどうすればよいか、いかなるやり口でもってカフル人と必要な交易を行なうか、さらには彼らの野蛮なる本性および習慣——。あれやこれや重要かつ新奇な事柄について必要欠くべからざる知識が得られるよう、私はこの簡潔な記録を書きしめたため。この航海については本ナオ船のピロット¹²がかなり詳しい手控えをしたためているが、私がこの記録において試みたのはその手控えの要約にすぎない。それに際し私はその手控えを適宜訂正し、このたびの遍歴でポルトガル人のカピタン・モール〔総司令官〕を務めたヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラ¹³が後日私に提供してくれた情報をそれと照らし合わせ、その真否を訊ねることに努めた。

¹² 原綴り “Piloto”. Cf. Comandantes Humberto Leitão & José Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, 3.^a edição, Lisboa, Centro de Estudos Históricos e Cartografia Antiga / Edições Culturais da Marinha, p.414. みずからポルトガル船に乗り組んでインディアからリスボアへ帰航した経験を有するリンスホーテンは、前掲書において、ピロット（和訳書によれば「操舵長」）の職分を次のように説明する。「操舵長は上甲板最後部の右側に^{ステュールマン}2つ、もしくは3つの居室をもち、下へはけっして降りず、もっぱら帆の上げ下ろしや針路をどの方向へ取るべきかを船長に指令し、またその統率ぶりを監視すると同時に、日々太陽の高度を測定して船の位置、針路を記録し、その日その日の風向き、天候のぐあいを書き留める」（『東方案内記』639頁）。ピロットは職階上、名誉職に近いカピタンより下であるが、メストレとともに、カピタンを凌ぐ最高額の俸給を得た。フランシスコ・コンテンテ・ドミンゲスは、1589年にインドへ送られた船隊の件費見積もりを紹介している。その船隊に加わったガレアン船サン・バルトロメウ号の乗組員の職階および月俸一覧を見ると、同船のカピタンが月俸2000レアルであったのに対し、ピロットおよびメストレはそれぞれ月俸3000レアルであったと判明する（cf. Francisco Contente Domingues, *A Carreira da Índia. The India Run*, Edição do Clube do Coleccionador dos Correios, [Lisboa], CTT Correios de Portugal, S. A., [1998], p.64）。

¹³ ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラが勇名を馳せたのは1570年シャウルの防衛戦においてである。エスタード・ダ・インディア（ポルトガル領インド）勤務時代に挙げた功績の報償として、71年10月27日、モサンビークおよびソファエーラのカピタン職を賦与され、実際同職にあったのは83年から86年まで。91年にはインド亜大陸西岸に本拠を置くポルトガル船団——「アルマーダ・ド・マラバール」——を指揮。パッセインで建造されたナオ船シンコ・シャーガス号に乗り94年、ポルトガルへ帰航途上、アソーレス群島コルヴォ島沖で、イングランドのカンバーランド Cumberland 公に指揮された船隊の攻撃を受け、シンコ・シャーガス号の防衛に奮戦（94年6月）。戦いはイングランド側の勝利に帰し、乗員のほとんどが殺され、ヌーノ・ヴェーリョは助命された13名のひとり。13人のうち11名までがフローレス島に置き去りにされる。ヌーノ・ヴェーリョはシンコ・シャーガス号のカピタン・ガスパール・ブラス・コレイアとともにイングランドへ連行される。1カ年の抑留後、身代金3000ドゥカードを支払って釈放され（このときブラス・コレイアの身代金も肩代わりしている）、母国へ帰還（cf. Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.109, note 1; *Grande Enciclopédia Portuguesa e Brasileira*, XXI, Lisboa / Rio de Janeiro, Editorial Enciclopédia, p.179）。



ロウレンソ・マルケスの河

南はロウレンソ・マルケスの河(現、デラゴア湾の一带)から、北はクァマの諸河川(ザンベジ河の流域)へ至るまでの地図。O Lyvro de Plantaforma das Fortalezas da Índia da Biblioteca da Fortaleza de São Julião da Barra, ed. Rui Carita, Lisboa, Ministério da Defesa Nacional / Edições INAPA, 1999 より

/fol.1/ NAVFRAGIO DA NAO SANCTO ALBERTO, & Itinerario da Gente, que delle se saluou.

De Ioaõ Baptista Lauanha Cosmographo
mór de elRey Nosso Senhor.

A NOTICIA da perdição da Nao S. Alberto no Penedo das fôtes, principio da terra do Natal, & a relação do caminho, que fizeram em cem dias os Portugueses, que della se salvarão, té o Rio de Lourenço Marques, onde se

embarcarão pera Moçambique, são de grãde importancia pera nossas Navegações, e pera aviso dellas muy necessarias. Porque o Naufragio ensina, como se devem haver os Navegâtes em outro, que lhes pôde acontecer, de que remedios proveito/fol.2/sos vsarão nelle, & quaes são os apparentes, & dânosos de que devem fugir, que prevenções farão para ser menor a perda no Mar, & mais segura à peregrinação per terra, como com menos perigo desembarcarão nella, & a causa da perdição desta Nao, que o he quasi de todas as que se perdem. A relação do caminho mostra qual devem seguir, & deixar, que apercebimentos farão pera á sua grãdeza & dificuldade, como tratarão, & communicarão com os Cafres, com que meyo farão com elles o necessario comercio, & sua barbara natureza & costumes. E pera que de cousas tão importantes & nóvas se tenha o necessario conhecimento; escrevo este brève trattato, resumindo nelle hũ largo cartapacio, que desta viagem fez o Piloto da ditta Nao; o qual emmendei, & verifiquei com a enformação, que depois me deu Nuno Velho Pereira, Capitão mór que foi dos Portugueses nesta jornada.

さて、ナオ船サント・アルベルト号は1593年1月21日¹⁴コシン〔コーチン〕を出発した。本船のカピタン¹⁵はジュリアン・デ・ファリーア・セルヴェイラ、ピロットはロドゥリーゴ・ミゲイス、メストレ¹⁶はジョアン・マルティンスであった。本船にはまた本国へ向かうドナ・イザベル・ペレイラ（ゴア島のカピタンでタナダール・モール¹⁷であったフランシスコ・ペレイラの娘。彼女は、セイランのカピタンであるディオゴ・デ・メーロ・コウティーニョの妻であったが今は未亡人である）が乗っていた。彼女は娘のドナ・ルイザを連れていた。16歳の見目麗しい乙女である。同様に本船に乗り組んでいた面々を列

¹⁴ インド洋ではモンサン monção と呼ばれる季節風が10月から翌年3月の間、北東から南西の方向に吹く（北東季節風）。4月から9月までの間はこれとは逆のモンサンが吹く（南西季節風）。インドを出帆するのはもちろん北東季節風の時期であり、10月から翌年3月までは一応出航が可能であったが、実際には12月を過ぎてインドを出航した場合、喜望峰を望見する地点に達するのは、ちょうどこの海域に寒さが募り、海も荒れる時期と重なることになる。クリスマスを目途にインドの港を発つことが望ましかったが、実際には、香辛料その他の財貨の積み込みに手間取る事態が生じて、かの地の出帆が2月や3月にずれ込むこともあった。

¹⁵ 原綴り “Capitão”. Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, pp.131-136. リンスホーテンは前掲書でカピタン（和訳書によれば「司令官」）の職分を次のように説明するのみ。
カピテン
「司令官は最後部の部屋と船尾展望台を専有し、もっぱら兵士を指揮して、夜間はいかれらを見張りに立たせる」（『東方案内記』640頁）。船内における最重要の実務はもっぱらピロットとメストレに委ねられていた。

¹⁶ 原綴り “Mestre”. Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, pp.355-356. リンスホーテンは前掲書でメストレ（和訳書によれば「船長」）の職分を次のように説明する。「船長は操舵長と同じ場所の左側うしろに、それと同数の部屋をもち、そこに立って銀の笛すなわちシフレでもって命令し、もっぱら大櫓および大櫓帆とその後方をつかさどる。かれはまた、船全体を統轄して、たとえば緊急に帆を作る必要のあるときは、みずから帆布を裁断して水夫らに縫わせるとか、何か不足のものがあればただちに補充するとか、あるいは時に応じて大砲の引降ろし引揚げを指令するなど、船内のあらゆることについて配慮し、監督する。さらに船長は、帆布とか釘、綱その他これに類するものを必要とするときは、その給付を、その船の仲買人^{スレイフェル}と登録係に請求し、責任の所在を明らかにするために、みずから帳簿に指示品目を明記しなくてはならぬ」（『東方案内記』639頁）。

¹⁷ 原綴り “Tanadar mór”. 警察（治安維持）・行政（徴税）・司法（裁判）の役割を兼備するある種の高等官。語源・用例については、cf. Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, II, New Delhi, Asian Educational Services, Reprint: 1988, First Published: 1921, pp.351-352)。

挙すると、ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラ（もとソファアラのカピタン）、フランシスコ・ヴェーリョ（前者の甥）、フランシスコ・ダ・シルヴァ、ジョアン・デ・ヴァラダーレス・デ・ソトマイオール、ドン・フランシスコ・デ・アゼヴェード、フランシスコ・ヌーネス・マリーニョ、ゴンサーロ・メンデス・デ・ヴァスコンセロス、アントニオ・モニース・ダ・シルヴァ、ディオゴ・ヌーネス・グラマーショ（マラッカのナオ船サン・ルイス号のカピタン。この船は針路を逸れてインディアへ漂着していた）、アントニオ・ゴディーニョ、エンリケ・レイテ、ペドウロ・ダ・クルス修道士（アウグスティノ会の修道士）、パンタレアン修道士（ドミニコ会士）、そしてその他多くの乗客である。

Partio pois a Nao S. Alberto de Co/fol.3/chim a vinte & hum de Ianeiro de mil, & quinhentos & noventa & tres, da qual era Capitão Iulião de Faria Cerveira, Piloto Rodrigo Migueis, & Mestre João Martinz, & nella vinha pera o Reino¹⁸ Dona Isabel Pereira filha de Francisco Pereira Capitão, & Tanadar mór da Ilha de Goa, Dona viuva mulher, que foi de Diogo de Melo Coutinho Capitão de Ceilão, & trazia Dona Luisa sua filha Donzella fermosa de dezaseis annos, & assi vinhão Nuno Velho Pereira Capitão que fora de Çofala, Francisco Velho seu sobrinho, Francisco da Silua, João de Valadares de Sottomayor, Dom Frâncisco de Azeuedo, Francisco Nunez Martinho, Gonçalo Mendez de Vasconcellos, Antonio Moniz da Silva, Diogo Nunez Gramaxo Capitão da Nao S. Luis de Malaca, que arribara á India, Antonio Godinho, Henrique Leite, & Frey Pedro da Cruz frade Agostinho, & Frey Pâtalião Dominico, & outros muitos passageiros. †

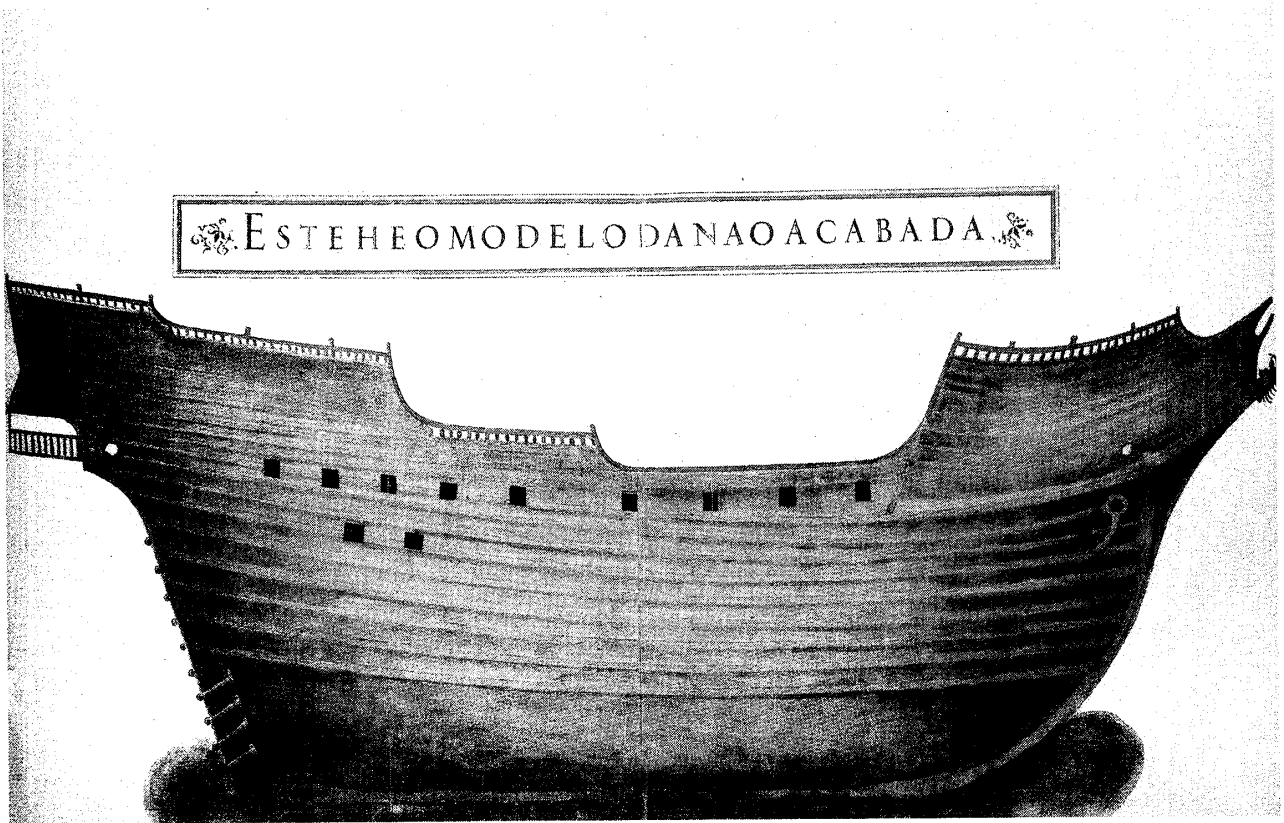
ナオは好天に恵まれて航行を続け南緯 10 度に達した。ところが難船の兆候がきざしはじめたのはこの海域であった。ナオに水の入り込む隙間がひとつ見つかったのである。もっともその隙間はとるに足らぬものであり、サン・ロウレンソ島〔マダガスカル〕の南端をめざして航行するその妨げになろうとは思われなかった。しかし南緯 27 度に達したとき南風が起こり、このために隙間からの浸水が増えた。風は激しさを加え、ナオは舳先を極力風上へ向けた。サン・ロウレンソ島の南端からできる限り遠ざかるためである¹⁹。そうこうしているとき、ナオはもろに逆風を受けグルペ〔船首斜檣。バウスプリット〕に亀裂が走った。ただしこれには早急な修理が施された。

† E fazendo a Nao sua viagem cõ tempo /fol.4/ prospero chegou a altura de dez graos da parte do Sul, na qual parajem teve principio a sua perdição; porque nella se lhe abrio hũa Agoa, & posto que pouca, & que não estorvasse a Derrota que se levava em demanda da pôta Austral da Ilha de S. Lourenço, chegada porem a vinte & sete graos sobreveo vento Sul cõ que esta Agoa creceo, & arrijando²⁰ o vento, hindo a Nao pella Bolina, & metendo muito de ló, por se afastar da ditta ponta, deu hũa grande cabeçada, com que rendeo o Goroupez, que logo se concertou.

¹⁸ 初版本でここにピリオドが打たれるのは明らかに誤り。コロン(ドイス・ポントス)が正しいであろう。

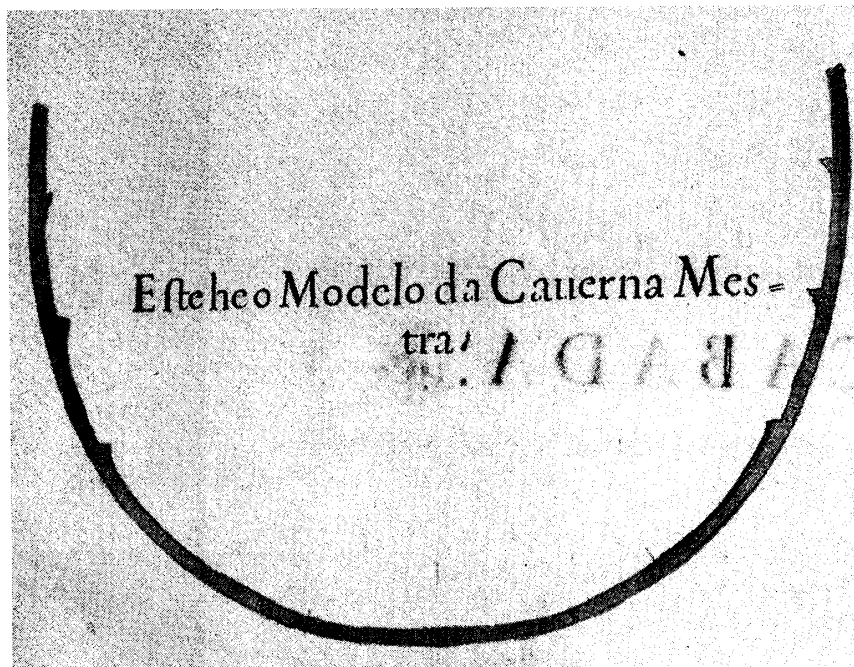
¹⁹ 原文 ‘arrijando o vento, hindo a Nao pella Bolina, & metendo muito de ló, por se afastar da ditta ponta’. アントニオ・セルジオによるパラフレーズ (cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, III, p.20, nota) と、ボクサー英語訳 ‘and the wind blowing harder, and the ship sailing close-hauled very near the wind, in order to steer clear of the said point’ (Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.110) を参考にして訳出した。

²⁰ 海賊版に見える “arrojando” は誤記か。



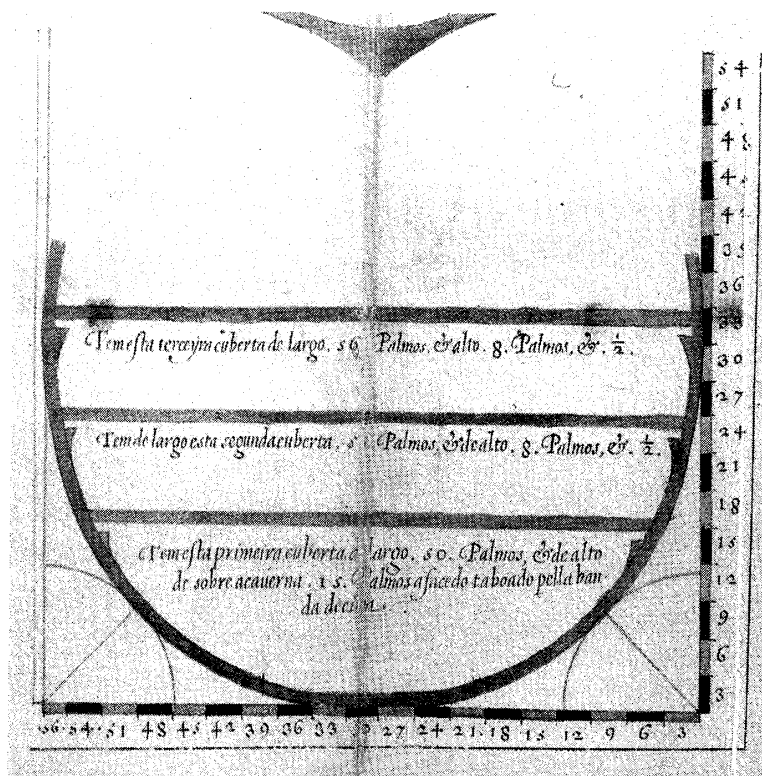
完成したナオの模式図

Liuro de traças de Carpintaria com todos os Modelos e medidas pera se fazerem toda a navegação, assy d'alto bordo como de remo traçado por Manoel Frz [Fernandez] official do mesmo officio, 1616, f.71. Academia de Marinha, Livro de Traças de Carpintaria por Manuel Fernandes, Lisboa, 1989 より



ナオのカヴェールナ（肋材）の模式図

Liuro de traças de Carpintaria com todos os Modelos e medidas pera se fazerem toda a navegação, assy d'alto bordo como de remo traçado por Manoel Frz [Fernandez] official do mesmo officio, f.71.



ナオの甲板（3層）の計測図

Liuro de traças de Carpintaria com todos os Modelos e medidas para se fazerem toda a navegação, assy d'alto bordo como de remo traçado por Manoel Frz [Fernandez] official do mesmo officio, f.71. 上から “terceyra cuberta” (第3甲板), “segunda cuberta” (第2甲板), “primeira cuberta” (第1甲板)の順。それぞれの甲板の幅と、高さ(第3甲板と第2甲板, 第2甲板と第1甲板, 第1甲板とカヴェールナ基底部, それぞれの高低差)がパルモ(掌尺)単位で示してある。

このようにまずは静穏な天候のもと、ナオは航行を続け、ポンプによる水の汲み出しも大した苦にはならなかった。やがて3月21日、南緯31度半の地点でテラ・ド・ナタールが望見された。その岸沿いを航行しつつ、翌日緯度を計測したところ、南緯32度と判明した。その日の夕刻、陸から逆の西風が吹きつけ、ナオはただ大横帆を張っただけの状態ですら沖へ戻された。第2折半直の時間帯に²¹、ナオは大量の浸水に見舞われだし、ポンプ内の水嵩はたちまち増えはじめた。このようなことを引き起こすべき強風が吹いたわけでも高波が襲ったわけでもなかった。浸水の様子を確認するために下へ降りた。浸水は船尾のピカ〔ファッション・ピース〕²²のあたり、それも1本のカヴェールナの下方で²³生じていると判明

²¹ 原語 “no quarto da Modorra”. ボクサー英語訳 “in the second watch” にもとづき、杉浦氏より受けた教示は次のとおり。船内における夕直(evening watch)は16時から20時まで。食事交代を行なうためこの時間帯はさらに “first dog watch”(第1折半直)と “second dog watch”(第2折半直)に分かたれる。したがって問題の時間帯は具体的には18時と20時のあいだとなる。

²² 原語 “Picas de Popa”. ボクサー英語訳に “fashion-pieces of the stern”. ピカとは、船首および船尾に、竜骨を跨ぐように、左右均整のとれたY字形もしくはV字形に屈曲して配された木製の部品。杉浦氏より「船尾形成材」という訳語の教示を受けた。Cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, III, p.21, nota.

²³ 原語 “por baixo de hũa Caverna”. “Caverna” は「肋材」を意味するが、ボクサー英語訳 “under a floor-timber” に照らし、「肋材」ではなく「フロア・ティンバー(肋根材)」の訳語を宛てるべきか。したがってこの箇所は「(船尾形成材

した。そこはきわめて危険でしかも修復の難しい箇所である。カピタンおよびオフィシアルたちには次のように思われた。修理はたぶん可能であろう。ただしそれは上述のカヴェールナを一部切り取ってしまえばだ、と。そして実際のとおり行なわれた。カヴェールナを切り取った結果、浸水を一時食い止めることができたものの(この朗報をもたらした者に対し、ピロットとメストレはヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラに祝儀をやって欲しいと頼み、彼はそのとおりにしようと約束した)、好ましい状況はほとんど長続きしなかった。なぜなら従来からの浸水のためその箇所は脆弱になっており、ついにそれがよりいっそうの猛烈さで海水に突き破られたからだ。ナオへ海水がどっとなだれ込み猛烈な勢いで水嵩が増した。

Navegãdo deste modo com tempo bonança, & sem a bomba dar muyto trabalho, ouverão vista da terra do Natal aos vinte & hũ de Março em altura de trinta & hũ graos & meyo, a qual cósta correndo, & tomada a altura o dia seguinte, se acharão em trinta & dous graos, em cuja tarde ouve vento Oeste por riba da terra, cõ que se fizerão na volta do Mar só com as vélas grandes, & no quarto da Modorra, sem vento, nem mar, que o cau/fol.5/sassem começou a Nao fazer muita Agoa, crescendo em grande quantidade na Bõba. Forão logo abaixo a reconhecella, & entendeosse que entrava pellas Picas de Popa, por baixo de hũa Caverna, lugar muy perigoso, & de difficil remedio. Pareceu ao Capitão, & aos officiaes, que o poderia ter, cortandosse hum pedaço da ditta Caverna; & assi se fez. E posto que cortada se tomou a Agoa, & começou a estancar (da qual boa nova, o Piloto, & Mestre pedirão alviceras á Nuno Velho Pereira, & elle lhas prometeo) durou pouco esta milhoria, porque como a Agoa achou aquelle lugar fraco, arrombouo²⁴ com muito mayor furia, & entrando na Nao creceo em grande demasia. †

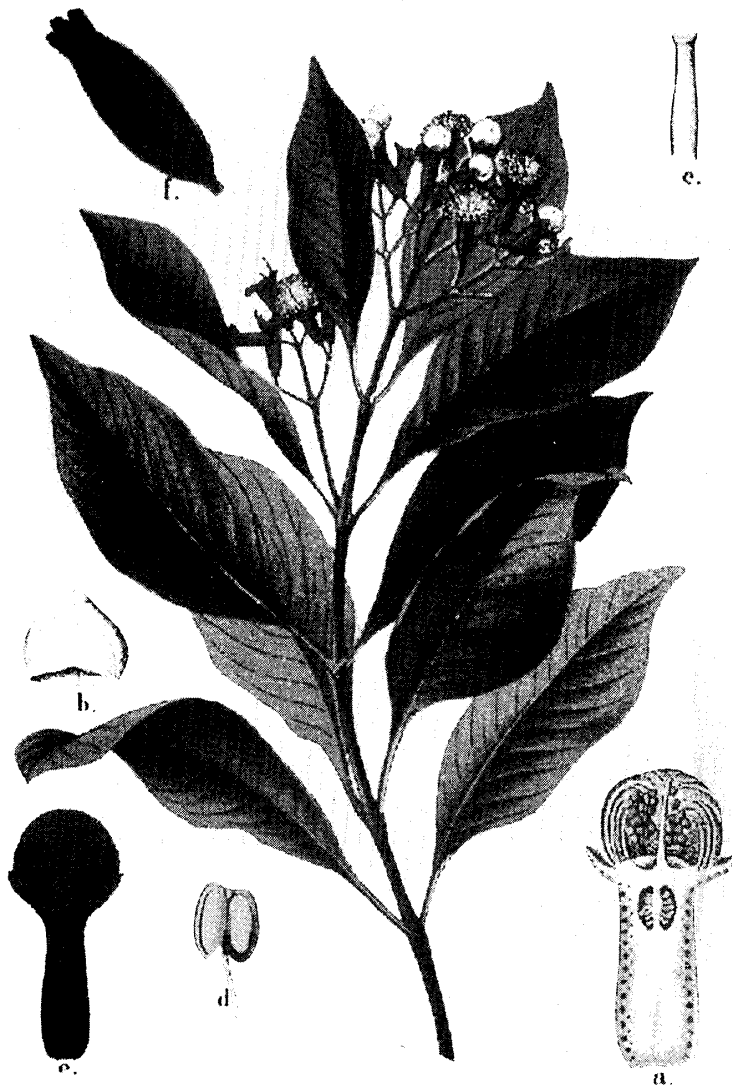
このたびのケースでも、これときわめて類似したナオ船サン・トメ号の難船でも、経験的に明らかになっているとおり、こうした事態に追い込まれたときは、何よりも浸水を止めるためのあらゆる手立てが講じられかつ実行されねばならない。しかしそれは木材〔肋根材〕を切り取るような手立てであってはならない。木材〔肋根材〕の強度を減ずるよりもそれを高めることこそ緊要なのだ²⁵。というのは、肋根材を切り取るのは見かけ上いかにも妥当なようではあるけれど、時を経てみれば損失であると判ることが多いのだ。そのことはこれら 2 隻のナオに起こったことから実証される。もしもサント・アルベルト号においてあのとき肋根材を取り去っていなかったなら、またサン・トメ号にあつてはエスコア〔スリーパー〕²⁶の一部とピカ〔前出〕の一片を切り取っていなかったなら、かくも大量の浸水に両船が圧倒され

直近の) 肋根材下方」と考える。Cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, III, p.21, nota. 「上述のカヴェールナを一部切り取って」というのは、そうすることによって浸水箇所を確認し防水措置を講じたということであろう。何らかの方法で応急的に浸水箇所をふさぎ、切り取ったカヴェールナを元に戻したのではなかろうか。しかしそのような糊塗策が万全であるはずはなく、当該箇所が数刻を経ずして再度海水に突き破られたのは当然である(杉浦氏の教示による)。

²⁴ 初版本に ‘arrombouoo’ とあるが、直接目的格の “o” が 2 度繰り返されているのは明らかな誤りであり、校訂する。

²⁵ 原文 ‘se devem de procurar, & fazer todos os outros remedios pera tomar a Agoa, mas não este de cortar madeira, sendo mais necessario acrecentalla, que tiralla,’。いくら応急的補強に用いるためとはいえ、肋根材を切り取ってそれを浸水箇所に転用しようとしたのが致命的にまずかった、という意味か。

²⁶ 原綴り “Escoa”。ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』所収テキストには “escota” とあるが、初版本の綴りが正しい。ボクサー英語訳に “sleeper”。アントニオ・セルジオの注記によると、「内竜骨 sobrequilha のそばにある太い板



チョウジ

フトモモ科の熱帯性常緑高木。マルク諸島の原産。高さ数メートルに達する。白・淡紅色の花をつけ香が高い。蕾を乾燥したものが丁香(クローヴ)と呼ばれ古来有名な生薬・香辛料。A *Epopéia das Especiarias*, ed. Inácio Guerreiro, Lisboa, Instituto de Investigação Científica Tropical / Edições INAPA, 1999 より

† E assi tem mostrado a experiencia, por este successo, & pello da Nao S. Thome, que foy quasi á elle semelhante, que se devem de²⁷ procurar, & fazer todos os outros remedios pera tomar a Agoa, mas não este de cortar madeira, sendo mais necessario acrecentalla, que tiralla, porque posto que tem boa /fol.6/ apparencia, he depois muy dânosos, como se vio nestas duas Naos, que se se não cortara em S. Alberto hũa Caverna, em S. Thome hum pedaço da Escoa, & ponta de²⁸ Pica, não se senhareara dellas tanto a Agoa, & sendo menos, & aproveitando

²⁷ ここに前置詞“de”を用いるのは中世ポルトガル語の用法であり、海賊版では削除されている。

²⁸ この“Pica”は既出であり定冠詞を附するのが適切だとすれば、前置詞“de”と女性定冠詞“a”の縮約形である“da”を用いるほうがよいか。海賊版では“da”と校訂される。

mais os outros remedios, póde ser que esta pudera arribar á Moçambique, & a outra dera á Córta, & não se perdera tão longe della.

オフィシアルたち²⁹はナオが危険な状態に陥っているのを見、そして船内に 18 パルモもの浸水があるのに鑑み、船荷を投棄することと、船尾を風の吹いてくる方向へ向けることが決定された。いずれの措置もただちに実行に移されはじめた。メストレはメインハッチ³⁰を開け、そこを通じ樽でもって水を外へ汲み出した。このためにナオの負担は大いに軽減された。このことが、お宝のかずかずを大箱に積み込み、後生大事にこれを甲板に置いていた連中の耳に入った。連中はあわよくばという気持ちを起こし、船荷の投棄をびたりとやめた。うまくゆけば命ばかりかお宝も失わずに済むのではないか、という期待を抱いたのである。しかしヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラは、そういう貴重品を諦めてくれたらという条件を出したうえでこう約束した。デウスが無事に我らを陸へ運び給うた暁には、私自身の積荷である 45 キンタルのクロウヴ〔チョウジ〕を進呈しよう、と。連中の欲心をくすぐるこの約束の効果は覲面であった。ただちに甲板からはきれいさっぱりと障害物が消えた。がその後、再び危機が増大し、砲手らのトルダ〔最後部の部屋〕にあるものも、香料の船倉にあるものもすべてが海へ投棄された。たちまち海面はおびただしい財貨に覆われた。大半は所有者によって手ずから投棄されたものであった。かつてあれほど愛着と尊重の対象であった財貨のひとつひとつが今や嫌悪と侮蔑の対象に一変した³¹。

Vendo os officiaes o perigoso estado da Nao, & que nella avia dezoito palmos de Agoa, determinarão, que se alijasse, & arribasse em Popa, hũa cousa, & outra se começou logo a executar, & o Mestre fez Lestes a Escutilha grande, da qual com Barris deitavão a Agoa fóra, que foy grande alivio á Nao. O que entendido de algũs afeiçoados aos brincos dos seus caixões, que levavão no Convés³², pararão em os alijar, esperando ja salvarse com elles, mas prometendolhes a troco Nuno Velho Pereira (se Deos o levava a salvamento a terra) /fol.7/ corenta & cinco quintaes de Crauo, que trazia na Nao, pode tanto esta sombra de interesse, que ficou logo desembaraçado o Convés, & crescendo depois o perigo se deitou ao Mar tudo o que avia na Tolda dos Bombardeiros, & nos Payoes das

²⁹ 原綴り “officiaes”. この語彙には一般的に「士官」と「職人」ふたつの意味がある。『海難悲話』においては明らかに後者の意味で用いられていることがあるが、杉浦氏よりここでは「士官」のほうが適切であるとの教示を受けた。リンスホーテン『東方案内記』和訳書の訳語に従って「高級船員」とするのがよいか。

³⁰ 原語 “Escutilha”. アントニオ・セルジオの注記によると「人や物の通路としたり風を通したりするための開口部」(*História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, III, p.21, nota)。

³¹ 『海難悲話』にはこのとおり、上下を問わず、ポルトガル海事関係者に瀰漫する「食欲」ぶりを指弾したり風刺したりするエピソードが頻繁に現われる。中世ポルトガルの典籍には必ず、宗教裁判所(サント・オフィーシオ)による検閲証——允許状——が附される(本書の冒頭にもそれが印刷される)。チェックの主たる対象になったのは、言うまでもなく、カトリック信仰を本質的に冒瀆したり聖職者の所業を風刺したりする記述であって、現世における俗人の強欲や、物質的富——多くの場合半ば不正な手段で獲得されたもの——の儚さ、さらにはそれに固執する人間の浅ましさを戒める記述は、検閲の対象になるどころか、『海難悲話』所収の物語を執筆した作者の多くは、宗教裁判所の意を迎えるため、むしろそうした“教化”に資する反面教師的エピソードを、意識的に、みずからの作品に盛り込もうと努めたように思われる。ちなみに「食欲」はカトリックの七大罪のひとつ。

³² 原語 “Convés”. 16～17 世紀の造船用語にあっては、ナオやガレアンなど楼を備えた船の上部甲板の一部——船首楼からトルダまで——を指すため一般的に用いられた語彙。Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.178.

Drogas, com que ficou cuberto de infinitas riquezas, lançadas as mais dellas, por seus proprios donos, dos quaes erão naquelle tempo tão aborrecidas, & desprezadas, como em outro forão amadas, & estimadas. †

すでに夜が明け染める刻限となり、新しい一日が始まろうとしていた。水は猛烈な勢いで入り込んでいた。そのため第2甲板から箱の撤去など行なうどころではなくなっていた。そうした箱は槌でもって打ち壊され、その中にあった財物は海上へ投棄された。メインハッチに汲み出し用の桶が、もうひとつ別の桶がハッチウェーに、さらに別の桶がさらに香料の倉庫に備えてある。そうしたところに入り込んだ水の汲み出しが樽を用いて行なわれた。同じことはポンプを用いても行なわれたが、いずれの手立ても浸水の軽減には役立たなかった。終日この作業は続いた。私はこちら、君はあちら、というふうに分担を決め、ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラばかりか、カピタンもフィダルゴも兵士も加勢したし、メストレも水夫を率いて力を貸した。皆てきぱきと、しかも懸命に作業に取り組んだ。夜になってコショウのため目詰まりを起こしたポンプはすっかり使い物にならなくなった。船内の浸水は12パルモであった。多くの者はもうだめかと観念し意気消沈した。気力を失っていない者もさすがに疲労困憊、第2甲板へ降り、敢えて浸水を樽に満たしにゆこうとする者はいなかった。その作業に継続して携わることこそ、本船が助かるか否かの分かれ道であったにもかかわらず。ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラはそれならと、みずからナオの底にある船倉へ降りた。彼は大きな危険を冒してポンプの綱にぶら下がりつつ下降し、樽を浸水で満たす作業にとりかかった。その他のフィダルゴも兵士もこのような垂範に励まされ、同じ作業に励んだ。当日は終夜、作業の手を休めなかった。その夜の終わり、すなわち翌日の始まりに陸地が望見された。それはピロットがきのうの午後そうすると予告していたとおりであった。こうして突然陸地が現われたことは一同を狂喜させ、船内は歓喜の声で満ちた。このままナオに残って猛烈な波に吞まれるよりは、陸へ上がるほうが命拾いの可能性はまだしも高まると、そう彼らには思えたのである。

† Era ja quasi menham, & principio do dia seguinte, & a Agoa entrava em tanta demasia, que da segunda Cuberta, se não podião tirar os Caixões, & quebrados com machados, se alijava o fato, que nelles vinha. E posto que avia hum Gamote grande aberto na Escotilha, outro pella Estrinqua, & outro pello Payol das Drogas, por onde com Barris se deitava a Agoa, & assi com as Bombas, com nenhũa cousa destas diminuya. Continuouse todo o dia este trabalho, acodindo /fol.8/ Nuno Velho Pereira, o Capitaõ, os Fidalgos, & Soldados, com grande presteza, & diligencia á hũas partes, & o Mestre com a gente do mar á outras. E sendo noute³³ se empacharão as Bombas com a Pimenta, & ficarão de nenhum seruiço. Auia ja na Nao doze palmos de Agoa, com que muitos perderão o animo, & os que o tinhão estavam tão cansados, que não havia quem fosse á segũa cuberta encher barris, na continuação do qual exercicio cõsistia a salvação da Nao. Pello que Nuno Velho Pereira deceo abaixo ao Prão³⁴ da Nao, com grande perigo pendurãdosse pellas cordas das Bombas, & começou encher os Barris, os outros Fidalgos, & soldados movidos deste exemplo, fizerão o mesmo, & não largarão mão do trabalho toda aquella noute. No fim da qual, & principio do dia seguinte se ouve vista da terra, como o Piloto prometera na tarde passada, cuja subita vista assi alegrou á todos, & encheo de alvoroço, como se nella não estivera tão duvi/fol.9/dosa a salvação das suas vidas: como na Nao, que o Mar hia sorvendo a grande furia.

³³ 中世ポルトガル語 “noute”（現在は “noite”）が初版本では一貫して用いられている。

³⁴ “Porão”（船倉）の誤植に違いない。

陸が望見されたのをしおに、カステロ〔船楼またはキャスル〕やポンテ³⁵の下、それから船尾にあったいっさいを海へ投棄することに精出した。それによってナオの負荷は相当に軽減されたため、トップセイル〔上檣帆〕とメインセイル〔主帆〕、そしてスプリットセイル〔斜檣帆〕を展開した。よりすばやく海岸へ達するためである。操船はかろうじて可能ではあったが、そのこと自体むしろ奇跡のように思われた。なぜなら本船の甲板は2層とも浸水でいっぱいであり、もろもろのメーザ³⁶も海面ぎりぎりを這っているかのようであったからだ。

Vista a terra attendeosse em alijar tudo o que avia no Castello, debaixo da Ponte, & na Popa, com que aliviada algum tanto a Nao, se derão as Vélas da Gavea, a Grãde, & a Sevadeira, pera chegar mais depréssa á côsta, governãdo porem sempre, & parece que milagrosamente, porque levaua já duas cubertas cheas de Agoa, & as Mesas arrastando. †

ヌーノ・ヴェーリョには後日、武器と火薬とが必要になると予見された。それがもしなければ、現に航しつつある海上での破滅が必定であるのと同じくらい、望見しつつある陸地に上がってからの生存はおぼつかぬように思われたのだ。そこでヌーノ・ヴェーリョはカピタンに指示を出し、見つかった武器・火薬・鉛・火縄を手当たり次第にかき集めさせた。彼は同じようにアントニオ・モニス・ダ・シルヴァに命令を下して一行が所有するエスピングルダ銃と、たまたま見つかったエスピングルダ銃をかたっぱしから集めてこさせ、それらを一纏めに束ねて樽に収納しておくよう命じた。そうしておけばエスピングルダ銃は無用の長物となることから救われるであろう。以上のことは大変な苦勞とともに行なわれた。出くわしたもののいっさいはトルダ〔前出〕にまとめて移した。ただナオの残骸が陸に打ちあげられたあと、それをナオから取り出すのは一苦勞であった。ヌーノ・ヴェーリョが先見の明をもってこのような注意を与えていたその意義は重大であった。もしもヌーノ・ヴェーリョにそうした才覚がなければ、ポルトガル人全員が助かる道は到底なかったであろう。というのは、こうして確保しておいた我らの武器にカフル人は胆をつぶし恐れおののき、わが同胞になつくようになり、食糧の物々交換に応じてくれたし、一行を殺してしまおうという本来のもくろみを実行に移そうともしなかったからである。この報告を書き進める過程でおいおいふれるであろうが、彼らには生来略奪と裏切りを好む性癖がある。ゆえに、これに類する不運あるいは悲惨な境遇に陥った際は、何より武器・衣服・銅を収納し、かつこれらを厳重に保管することへ多大な配慮が払われねばならぬ。それを元手に物々交換を行ない我とわが身を守るのだ。以上が生死の分かれ目である。そして上記のもののいっさいは、万一に際しより容易に運び出しうるようシャピテオ³⁷に配置されるよう心掛ける必要がある。

³⁵ 原綴り “Ponte”. 上部甲板。3層甲板のナオであれば第3甲板。Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.421.

³⁶ 原語 “Mesas”. “Mesas das enxárcias” の略。Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.354. 外舷側に取り付けられて、シュラウドの傾斜角度を緩くすることによりマストの固定強度を高めるとともに、測深する際の足場にも供する。杉浦氏の教示により「横静索係止台」もしくは「横支索係止台」という訳語を得た。訳文に描かれる状況に鑑みれば、「海面ぎりぎりを這っているかのようであった」という表現は必ずしも誇張ではあるまい。

³⁷ 原綴り “Chapiteo”. “Alcáçova” に同じ。船尾楼が2層からなる場合、下をトルダ、上をアルカーソヴァ(=シャピテオ)と呼ぶ。Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.26; p.156.

† E prevenindo Nuno Velho as futuras necessidades de Armas, & Munições, sem as quaes estava tão certa a perdição na terra que vião, como no Mar, em que andavão, advertio ao Capitão, que mandasse recolher as Armas, Polvora, Chumbo, & Murrões, que se achassem, & deu ordem, a Antonio Moniz da Silua, que ajuntasse as suas espingardas, & as que mais encontrasse, & atadas as metesse em algũa Pipa, para nella se salvarem. O que se fez ja com grande trabalho, recolhendosse /fol.10/ na Tolda o que se achou, donde, depois de vararem em terra os pedaços da Nao, se tirou com difficuladade. Foy esta prevenção, & lembrança de Nuno Velho de tanta importancia, que faltando, faltara o remedio de todos estes Portugueses, porque obrigados os Cafres do temor, & espanto das suas Armas, fizerãoosse domesticos, comutarão com os nossos seus mantimentos, & deixarão de executar suas vontades, inclinadas naturalmente a roubos, & traições, como se verá pello discurso desta relação, & assi em semelhantes desgraças, & desestrados sucessos tenhasse muita cõta cõ o recolhimento, & goarda das Armas, Roupas, & Cobre, pera o resgate, & defensão, pois nisso vay tâto, & advirtasse, que tudo se ponha no Chapiteo, pera que com facilidade se salve.



ナオ

作者不詳(16世紀, ポルトガル派)『処女1万1000人の殉教』*Martirio das Onze Mil Virgens*(部分)に描き込まれたポルトガルのナオ。リスボン国立美術館蔵。Francisco Contente Domingues, *A Carreira da Índia. The India Run*, CTT Correios de Portugal, S. A. より



ナオもしくはガレアン

狩野内膳の落款がある『南蛮人渡来図屏風』(16世紀末か17世紀初, 神戸市立博物館蔵)に描かれた南蛮船。南蛮屏風に見えるポルトガル船の中では際立って写実的な描写が行なわれている。『日葡辞書』に収載された“Curofune”(黒船)の語彙が示すとおり, 腐蝕防止のタールが塗られていた。松田毅一編『探訪 大航海時代の日本 1 南蛮船の渡来』(小学館, 1978年)より

いよいよ陸が近づくと、メストレの命令によってカルピンテイロ〔船大工〕はマストの切断を開始した。舵は水深8尋半の海底に触れてたちまち外れた。水深8尋のところでナオは海底をこすり、全船にこれまでなかったような衝撃が走った。はじかれたように人々はエンシャルセア³⁸の切断に駆けつけた。船上の人々の悲痛で凄惨な叫び声のなか、マストは倒れ落ちた。マストが倒れ落ちるとき、少なからぬ連中が無思慮にもそれに飛び乗ろうとした。そうすることが難破から身を守る確かな方法と考えたのである。しかしマストにはなお一部のエンシャルセアが絡まっていたのであろう、猛り狂う波が恐るべき勢いでナオを打ちつけては砕け散り、マストに激しく押し寄せたため、マストに乗り移った連中は皆、脚や腕をへし折られ溺れ死んだ。

³⁸ 原綴り“Enxarcea”. 横静索・シュラウド(マストの上から、またはバウスブリットの先端から両船側に張った支索)や段索・ラットリン(マストを支える静索に横に取り付けた綱ばしごの足場)など索具一式。Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.233.

Sendo ja perto de terra por ordem do Mestre, começarão os Carpinteiros cortar os Mastos, & em oito braços & meya tocando o Leme saltou fóra, & nas oito deu a Nao a primeira pãcada, pello que se /fol.11/ acodio lôgo á cortar a Enxarcea, com que cayrão os Mastos, cõ grãde, & lastimosa gritta de toda a Gente. Caydos os Mastos deitarãoosse muitos a elles inconsideradamente, parecendolhes seguro remedio, pera escapar do Naufragio. Mas como estivessem ainda pegados cõ algũa enxarcea, as impetuosas ondas, que cõ grande furia rebentavão na Nao, derão nelles, & todos afogarão, cõ pernas, & braços quebrados. †

こうした惨事を補って余りある、生存者一同にとって思いもかけぬ不幸中の幸いがあった。皆は上記の悲惨な情景をナオから目撃していたのだが、幸運をもたらしたのはほかでもない、例のマストであった。マストが倒れ落ちるときの一同の仰天ぶりはただごとではなかった。その衝撃の大きさに一同は極度に怯え、倒れ落ちるマストのためついに海へ叩き込まれるのかと覚悟を決めたところ、まさにその衝撃こそが彼らの命を救う幸運をもたらした。マストが船体を強打、これをぶち壊したその結果、ナオはまっふたつに割れ、上部甲板〔第3甲板〕が下部甲板2層〔第2甲板と第1甲板〕からもののみごとに分離してしまったのだ。これが、3月24日の9時と10時のあいだ、陸からおおよそ400パソスの位置で座礁した直後の状況である。下部甲板2層は座礁したところに取り残される一方、それよりも上の部分は陸のほうへ漂い、陸から遠からぬところに停まった³⁹。

† Recôpensousse este dâno cõ hũ bem não esperado dos viuos (que da Nao vião este triste espectáculo) o qual causarão os mesmos Mastos, porque as suas furiosas pancadas, que os espâtavão, & das quaes cõ grande terror esperavão serem sossobrados, essas forão seu remedio, desfazendo a Nao, & moendoa de maneira, que (depois de encalhar entre as nove & dez horas do dia, vinte & quatro de Março distâte de terra algũs 400. passos) se partio em duas partes, despegãdosse as Cubertas de cima, das duas de baixo. As quaes ficarão no lugar em que estavam en/fol.12/calhadas. E a parte superior se chegou á terra, & della ficou muy perto. †

船首にはカピタンやピロットやメストレがおり、多くの人々が彼らと一緒にであった。残りの連中はヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラとともに船尾にいた。ヌーノ・ヴェーリョは、ドナ・イザベルとドナ・ルイザに付き添いかつこれを勇気づけていた⁴⁰。彼は、マストと船尾との間に迫り、ともすれば船尾を乗り越えようとする大波から彼女らを守る防波堤であった。彼はふたりの貴婦人をラクダ織りの頭巾つき寛衣⁴¹の下に収容することによって、波の衝撃を和らげてやることに余念がなかった。その衝撃は特に船尾において猛烈であった。マストをぶざまに繋ぎとめているエンシャルセアがなお船尾に固着していたからだ。多くの者が大波に攫われぬようお互いの体を船尾の固定された木材にロープでもって縛り合わねばならなかった。泳ぎの心得がある連中は、みずからが身を寄せているナオのその残骸が陸に乗りあがる前に夜のとばりが下りてしまうことを恐れ、また、マストのため押しつぶされ海へ叩き込まれることを恐れて——そうなればマストの下敷きになって溺死することは避けられないから——、われさきに海へ

³⁹ 要するに、ナオの上部甲板だけが船首楼甲板や後甲板を載せたまま巨大な筏のようになって岸のほうへ向かい、接岸寸前で停止したということである（杉浦氏の教示による）。

⁴⁰ 原語 “animava”（鼓舞していた、元気づけていた）。ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』所収テキストに “amava”（愛していた、慈しんでいた。“amar”の未完了過去）とあるのは明らかに校訂ミス。初版本に拠って初めて正しい解釈を得られることの一例。

⁴¹ 原語 “hũ balandrao de Chamelote”。

踊り込んだ。が、おびただしく波間に漂う船材の残片に強打され、また、浜沿いの巨大でごつごつとした岩に砕ける大波の揺り返しをもちにかぶって連中の多くは溺死した。

† Estava na Proa o Capitão, o Piloto & Mestre cō muita gente, & a outra toda na Popa cō Nuno Velho Pereira, que acompanhava, & animava⁴² D. Isabel, & D. Luisa, & era seu reparo das ondas, que apertadas entre os Mastos, & a Popa, encapelavão por cima della, & em Nuno Velho (que tinha estas Fidalgas recolhidas debaixo de hũ balandração de Chamelote) quebravão o impeto, & não era tão pouco furioso (principalmente na Popa por estar a enxarcea que detinha os Mastos, nella pegada) que não fosse necessario atarense muitos homens com cordas a algũs Paos fixos della, porque não fossem levados dos Mares. Outros que sabião nadar, temendo que sobreviesse á noute antes de darem á cósta os pedaços da Nao, em que estavam, & que os Mastos os desfizessem, ou que os virassem, & assi ficassem debaixo delles afogados; botarãosse a nado, & com os golpes da muita madeira, que /fol.13/ andava vagando pello Mar, & com a reça das grossas ondas; que rebentavão em grãdes, & asperos penedos da praya, muitos delles se afogarão.

夜のとばりが下りはじめる頃、船尾と船首とをつなぐ^{たが}箍がはずれた。その刻限までは船尾と船首とは下のほうでしっかりと連結されていたのだが⁴³。それに伴ってマストもはずれた。船尾はまっすぐに漂って浜に座礁した。しかしヌーノ・ヴェーリョの心配は、南西へ流れる速い沿岸流が船尾を押し流してしまいはせぬかということであった。そこで潮がほぼ引ききったのを見計らって、ヌーノ・ヴェーリョはディオゴ・フェルナンデスという名の小姓にして忠実な兵士に命じた。泳いで陸^{おか}へゆき、陸に上がればロープを張り、強い潮流に堪えるよう、そのロープでもってナオの残骸をしっかりと縛りつけよ、と。兵士は懸命の努力で、また心からすすんでこの使命をまっとうし、船尾にいた人々の大半は浜に飛び降りた。真夜中に及んでカステロが船尾を斜めに横断するように分断したため、人々はまるで橋を渡るかのように船尾を伝って浜に下りた。早暁担当の当直時間が始まる頃、ヌーノ・ヴェーリョは船を脱した。フィダルゴも兵士もドナ・イザベルとドナ・ルイザを守りながらそれに従った。潮が満ちつつあるそのさなかに、彼らは陸上に固定されたロープに掴まりつつ上陸を果たした。潮が引くと船体はその全貌を現わし、そのときまで船にいた者も今度は体を濡らすことなく上陸してきた。わが同胞たちは、涙にむせびながら抱擁を交わし、お互いの無事を喜びあった後、不可思議なる受肉⁴⁴の日に、彼らを危機一髪、難船から救い、かの浜において彼らを救命することによって、主なるデウスが偉大なる慈愛を垂れ給うたことに限りない感謝を捧げた。我らが一行の到達した浜は南緯 32 度半に位置する。その浜は我らからはペネード・ダス・フォンテスと呼ばれ、周辺の黒人からはティゾンベと呼ばれる。生き延びたポルト

⁴² 注 40 参照。

⁴³ 原文 ‘se desapegou a Popa da Proa, que por baixo té aquella hora estiverão pegadas,’ 確かにこう訳せるが、この状況を脳裡に思い描くことは訳者の能力を超える。杉浦氏より頂戴した教示を次に掲げる。いわく、『『船尾と船首をつなぐ箍がはずれてしまった』の箍とは上甲板のことです。それまで船首楼甲板と後甲板とは、いずれも上甲板よりも上、つまりそれよりも高いところにあるので、上甲板が筏となってその上に乗っかる格好で漂流していた。上甲板は当然水浸しですからそこに人は乗れず、船客はその上にある、より高い前記 2 種の甲板上にいたということです。甲板はたくさんの木材を合わせて造ってあるためいずれは分解します。分解せずにつながっていたのは、たぶんビーム(船梁材)のお蔭と思われますが、それにも限界があります』。

⁴⁴ 原語 “Encarnação”。「受肉」とも「託身」とも。神の子の神性がイエズス・キリストにおいて人性と一致したこと。

ガル人を数えたところその数 125 人と判明した。また、命を保った奴隷は 160 人、死んでしまった奴隷は 34 人である。この日はこれ以降、陸に打ちあげられたナオの船材を燃やして火を熾し、そのそばでそれぞれが脱出時に身につけていた衣服を乾かすことに時間を費やした。寒さが非常にこたえたので火で体を暖め、ついさきほどまでの労苦や精神的な苦悩を癒すことに努めた。

Começandosse a noute, se desapegou a Popa da Proa, que por baixo té aquella hora estiverão pegadas, com que também se soltarão os Mastos, & encalhou a Popa muito direita na Praya. Mas receão Nuno Velho, que as grandes correntes daquela Córta, que correm ao Sudueste a levassem cõsigo, sendo ja muita parte de⁴⁵ Maré vazia, mandou a hum criado seu bom soldado, chamado Diogo Fernandez, que nadando fosse á terra, & nella posesse hum cabo; no qual amarrando aquelle pedaço de⁴⁶ Nao ficasse seguro das dittas correntes. O soldado o fez cõ muito esforço, & melhor vôtade, & a mayor parte da gente que estava nesta Popa saltou em terra. Sendo meya noute se atravessou o Castello na ditta Popa, & por ella como por Ponte, se poserão na praya os que nelle estauão. E na entrada do /fol.14/ quarto da Alua desembarcou Nuno Velho Pereira, & os Fidalgos, & Soldados que o acompanhauão, & á D. Isabel, & á D. Luisa, os quaes se forão alando pello cabo, que estava em terra, em quãto a Maré foy enchendo, & estãdo vazia ficarão em seco, & á pé enxuto sairão. Depois que todos se receberão com chorosos abraços, derão muitas graças a Deos Nosso Senhor pellas grãdes misericórdias, que com elles vsou no dia da sua milagrosa Encarnação, livrãdoos de hum tão perigoso Naufragio, & salvandoos naquella praya (cuja altura Austral he de trinta & dous graos & meyo) a que os nossos chamão o Penedo das fontes, & os Negros Tizombe, & cõtados os Portugueses vivos acharão cento & vinte & cinco, & mortos vinte & oito, & Escravos vivos, cento & sessenta, & mortos trinta & quatro, & o que restou do dia, se passou, enxugando o fato, com que cada hum escapara, ao lōgo de muitos fogos, que logo se fizerão da madeira que da Nao deu á /fol.15/ Córta aqueandosse do muito frio que sentião, & repousando dos trabalhos, & angustias passadas.

ナオ船サント・アルベルト号の破滅、そしてその難船の顛末は以上のとおりであった。実にこの船の遭難はカーボ・デ・ボア・エスペランサ〔喜望峯〕の嵐のためにもたらされたのではない。そもそもサント・アルベルト号はカーボへ到達しもせぬうちに、しかも荒天に妨げられたわけでもないのに難破に及んだのである。ではこの船を遭難に追い込んだ要因は何か。それはカリーン〔傾船〕による整備しか行なわなかったこと、それと過剰積載だ⁴⁷。本船もまた他の多くの船がそうであったように、上記の要因によ

⁴⁵ 海賊版で“da”と校訂されているのがより正しいか。

⁴⁶ 海賊版で“da”と校訂されているのがより正しいか。

⁴⁷ リスボア・インド間往路航海に深刻な危険をもたらしたものが乗船者の過密状態にあったとするなら、復路航海におけるそれは香料を中心とするもろもろの積荷の過剰積載であった。1589年にインディアを發って帰航するポルトガル船に同乗する機会を得たオランダ人リンスホーテンによれば、誰の荷物であろうと、たとえそれがどんなに小さなものであろうと、登録簿に記帳されたもの以外、いっさい船内に持ち込んではならぬ決まりであった。船荷を正当に所持している旨の証明書を持参しても、荷物の監視人や船荷係には賄賂を握らせる必要があった。できる限り多量の積荷を船内に持ち込ませ船客から最大限の賄賂をむさぼろうとする側と、多くの私物を母国に持ち帰ろうと躍起になる側との思惑が一致し、過積載は慢性的となり、カレイラ・ダ・インディア——リスボア・インド間定期航路——を行き交う船は常時沈没の危機にさらされた。高級船員といえども積荷の搬入には口出しができず、荷積みが完了すると、監視人と船荷係はさっさと下船してしまったから、「船内は、上甲板までいたるところ荷物で埋まり、たいてい7~8個の箱がうず高くずらりと積まれ、主綱、前甲板の上から操舵長の座席のところまで、大きな壺、樽、箱、鶏

って海底に葬り去られたのだ。カリーンによる整備と過剰積載を生むのは請負人や航海者の食欲である。船を陸へ上げて手入れするよりは、カリーンによる整備のほうがはるかに安上がりである。そのため、請負人は後者の、すなわちイタリア式整備法を好んで用いる⁴⁸。この整備法は東方の海〔地中海〕でなら確かに有効であろう。なるほど東方の海の嵐や暴風雨になら、ガレー船でもよく耐えることができるし、8日に1度は港に立ち寄ることもできる。ところが我々がオセアーノ〔大西洋やインド洋の茫漠たる大海を指すか〕においては、こうした整備法の採用が船を破滅させる諸要因のひとつとなる。我々がオセアーノにあつては海上に留まる期間がきわめて長いから、必然的に船材——たとえその船材の伐採が適切な時期に行なわれていたとしても——の腐蝕が進みやすい。さらに、船体を傾^{かし}がせるだけの整備しか行なっていないなら、傾けたときの巨大な船体の重みが船材にのしかかり、船材の噛み合わせが悪くなる。また、そうした整備しか施さない船にまいはだを詰め込んででもその効果は薄い。船板から湿気が抜けず、充分な乾燥を得ることが期待できないからである。というわけで、後日、航行中に船が大きな潮流〔波浪〕に翻弄されたり激しい風に見舞われたりすると、まいはだは簡単に船から分離する。船板に隙間ができ、そこから水が入り込んで、そのため船は沈没に至る。かくて、これまでの経験が示してきたとおり、こんなにも欠陥の多い整備法に拠っていなかった昔は、1隻の船がインディアへの航海を10回ないし12回成し遂げたものであるが、今やこの誤れる整備法のため2度の航海すらおぼつかない⁴⁹。

Tal foy a perdição desta Nao S. Alberto, taes os sucessos do seu Naufragio, causado não das tormentas do Cabo de boa Esperança (pois sem chegar á elle cõ prospero tempo se perdeo), mas da Querena, & sobrecarga que como á esta Nao, assi á outras muitas no fundo do Mar hão sepultado. Ambas pos em practica a cobiça dos Contrattadores, & Nauegantes. Os Contrattadores, porque como seja de muito menos gasto dar Querena á hũa Nao, que tirala á monte, folgão muito cõ a invenção Italiana, a qual posto que serve, pera aquelle Mar de Levâte, á cujas tormentas, & tempestades podem pairar Galés, & onde cada oito dias se toma porto. Neste nosso Oceano he o seu vso hũa das causas da perdição das Naos; porque alem de se apodrecerem as madeiras (posto que sejão colhidas em sua sazão) cõ a cõtinha estácia no Mar, & desenquadrnarensse, com /fol.16/ as voltas da Querena, & grande peso de tamanhas Carracas. Calafetandoas por este modo, recebem mal a estopa por estarem humidas, & pouco enxutas. E quando depois navegãdo são abaladas de grãdes Mares, & combatidas de rijos ventos, despedemna, & abertas dão entrada á Agoa, que as sossobra. E assi tem mostrado a experiencia, que quando desta dannosa inuenção, se não vsaua,

籠で充満して、まるで迷路にでも入り込んだようであ」ったという(『東方案内記』634頁)。

⁴⁸ ここでラヴァーニャは、カリーン(傾船)すなわち彼が「イタリア式整備法」と呼ぶもののしか行なわぬのはまずいと述べている。船底の保全を期すため、干潮を利用し、船体を浅瀬^{かくさ}に搁坐させて行なう整備のことを古い海事用語で“dar a monte”と呼んだ(Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.363)。テキストには“tirar a monte”という表現が用いられているが、意味は同じ(*ibid.*)。このようなナオの整備法に対する特別な日本語の呼称はない。

⁴⁹ 原文 ‘fazia hũa Nao dez, ou doze viagens á India, & agora com ella não faz duas.’ この回数であるが、ボクサーはテキストに見える「10回ないし12回」という数字を誇張であるとする。その根拠として、稼動期間が記録的に長かったナオ船シャーガス号でさえ8回または9回を超える往復航海を成就してはいない(‘This is an exaggeration, as even the long-lived *Chagas*, which apparently held the record in this respect, did not make more than eight or nine round voyage’)という事実を指摘する(Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.116, note 1)。原文にある「インディアへの航海」(“viagens á India”)は素直に訳すと「インディアへの(片道)航海」の意味にしかならないが、そのインディアへの航海が「10回ないし12回」というのであるから、実質的に10回ないし12回の往復航海を意味すると解釈すべきなのであろう。

fazia hũa Nao dez, ou doze viagens á India, & agora com ella não faz duas.

こうした欠陥をさらに助長するのが船大工である。彼らはナオを造るにせよ修理するにせよ、請負制度のもとにこれを行なう。この制度こそ造船の全工程において害悪を垂れ流す元兇である。彼らは材料をけちることができぬと見ると工期を節約しようと、これほど大事な作業には当然求められてしかるべき細心さで仕上げに励むことを怠る。かくていっさいを不完全なままに放置する。古いナオに欠陥なり不備なりが見つかり、もしそれらにきちんとした修理を施せばおのれの儲けにはねかえると判断したとき、彼らはその欠陥・不備に目をつむる。そればかりか損傷がよく修理されているかのように見せかける。そうした見せかけの下にこそ、難船の隠れた、しかし確実な理由がひそんでいるのだ。

Acrescentão este dãnno os officiaes, que as fazem, ou concertão de empreitada (que em toda a fabrica prejudicia⁵⁰) os quaes por apouparem o tempo, ja que não pôdem as Materias, não acabão cousa algũa como convem, & se requiere, em obra de tanta importancia, & assi deixão tudo imperfecto, & descobrindo na Nao velha eyvas, & faltas, que se não remendarão bem sem perda sua, dessemulão cõ ellas, & enfeitão o dãnno de maneira, que pareça bem concertado, & debaixo d'elle /fol.17/ fica a perdição escondida, & certa. †

船材を適切な時期・時節以外に伐採することも難船の要因である。伐採に適した時期とはジャネイロ〔1月〕の月が欠けるときなのであるが、それに対する配慮を欠くから、船材は大変重く未熟で不適切なものとなる。そのようなわけで船材は歪んだり反り返ったり割れたりする。そして所定の位置から簡単に外れる。その結果、釘もまいはだもたやすく落ちてしまい船材に隙間が空く。外から入る海水の湿気と、内から発するコショウや香料のただならぬ熱気とによって船材は初回の航海でたちまち腐り、だめになってしまう。1隻のナオを破滅させるには、たった1枚の船材が、それも不適切な時期に伐採されたそれが1枚あるだけで、もう充分なのだ。この船〔サント・アルベルト号〕に使われていた材木も定めしそんな状態であつたに相違ない。竜骨〔キール〕（これこそあらゆるナオの基礎であり抛り所なのだが）の腐食は目を覆うばかりであつて、怒り狂う波浪のため、基礎であり抛り所であるもの⁵¹〔すなわち竜骨か〕が座礁しているナオから挽ぎ取られ（そこにあつた多少の銃砲類ともども）浜へ打ちあげられると、ヌーノ・ヴェーリョは試しにそれをベンガーラ〔ベンガル〕の鞭で叩いてみた。竜骨は細かく砕けてしまった。

† Cortãose tambem as Madeiras fóra de seu tempo, & sazão, a qual he na Lũa mingoante de laneiro, pello que são pesadas, verdes, & desasonadas; & como tais, torcem, encolhem, & fendem, & desencaxãose do seu lugar, com que despedindo a pregadura, & estopa, abrem⁵²; & com a humidade da Agoa de fóra, & grande quentura da Pimenta, & Drogas de dentro; logo se apodrecem, & corrompem na primeira viagem, & assi basta hũa só taboa colhida sem vez, pera causar a perdição de hũa Nao. Tal devia ser a madeira desta, pois a sua Quilha (base, & fundamento de todas as Naos) era tão podre, que depois que a furia dos Mares arrancou o seu fundo donde estava, & deu com elle á Cósta (com algũas peças de Artelheria, que nelle ficarão) com hũa cana de Bengala a desfez Nuno Velho Pereira em pequenos pedaços.

⁵⁰ 海賊版は‘he prejudicial’と校訂するが、意味は変わらない。

⁵¹ このあたりの原文は‘depois que a furia dos Mares arrancou o seu fundo donde estava, & deu com elle á Cósta’であるが、コンテキストに鑑み、文中の“fundo”を前出の“Quilha”に同一と見なして、仮にこう訳しておく。

⁵² 初版本の正誤表により“abre”を“abrem”と訂正する。

こうした損害を蒙ることの責めは航海者にもある。否むしろ、航海者の負うべき責めこそより大きい。たとえば彼らはナオに平然とおのれの命を賭ける。ナオに積込みを行なうに際し貨物の配置に必要最小限の配慮さえ払わない。軽い貨物は下部に、重い貨物は上部にそれぞれ収納する、というやり方がまかり通っているが、これは断然、その反対でなければならぬ。てっとり早く儲けようとたくらむのが彼らの性であるから、過剰積載に走り、ナオとよく釣り合いのとれた貨物の積載量をあっさりと超過する。積載量が過剰であれば、操船は必然的に不自由となり、それに前述したような不手際がたとえひとつでも加わろうものなら、たちまち船には隙間があき、沈没して海の藻屑と消える。過剰積載こそ、海難のもっとも決定的な要因であり、もしこの一要因さえ取り除けば、他にもろもろの要因が寄り集まったところで1隻のナオを破滅へ導くに十分な要因とはならない。言い換えれば、他にこれといった要因は見当たらなくとも、過剰積載という単一要因さえあれば難船の公算はきわめて高くなる。経験の示すところによると、保全や修理をカリーンによってしか行なわぬ老朽船であっても、ぎりぎりまで貨物を詰め込んだりせねばインディアからの帰航は可能であるのに対し、新造船であっても過剰積載を行なえば破滅する。

Os Navegantes, não são menos culpados neste danno, importandolhes mais /fol.18/ pois aventurão as vidas na Nao, a qual carregão, sem a necessaria destribuição das mercadorias, arrumando as léues na parte inferior, & as pesadas na superior devendo ser ao contrario. E por enriquecerem brevemente de tal maneira a sobrecarregão, que passão a devida proporção da carga á Nao, a qual excedida he forçado que fique incapaz de governo, & que precedendo qualquer das cousas apontadas, abra, & se va a pique ao fundo. E he esta tão forçosa, que sem ella, quasi não bastão as outras a perderem hũa Nao, & esta sem ellas si. Mostrando a experiencia, que algũas Naos velhas, remendadas, & concertadas com Querena vem da India, porque não trazem nem a carga cõ que podem, & as novas cõ a sobrecarga se perdem.

【3月26日】我らが同胞は、上述の経緯をもって、ナオ船サント・アルベルト号の難船から一命を取りとめた。その翌日すなわち3月26日、カピタンは、武器であれ食糧であれ、見つけ次第ありったけ拾い集めてくるよう命じた。その命令はただちに実行に移された。メストレとコントラメストレ⁵³は水夫全員とともにナオの残骸のもとに赴いたし、兵士は浜辺の捜索に向かった。火薬入りの樽を3つ持ち帰った者もいれば、12丁のエスピンガルダ銃に幾つかの円形楯や剣、3つの大釜、それに少量の米を持ち帰った者もいた。火薬は砲手の手に託された。その中でもっとも経験を積んだ者へコンデスターブレ⁵⁴の役目が与えられた。砲手の手に火薬が託されたのは、浜に漂着した樽ひとつ分の酢を用いて火薬の乾燥と

⁵³ 原綴り “Cõtramestre”. Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.177. リンスホーテンは前掲書でコントラメストレ(和訳書によれば「水夫長」)の職分を次のように説明する。
ホーフボーツマン
 「水夫長は前甲板に居室をもち、前檣ならびに前檣帆を受け持つ。かれは船長と同じく銀の笛をもっており、前檣に関するすべてのことと、それから錨をしっかりと縛りつけておくよう監督する」(『東方案内記』639頁)。

⁵⁴ 原綴り “Cõdestabre”. Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.173. リンスホーテンは前掲書でコンデスターブレ(和訳書によれば「砲手長」)の職分を次のように説明する。
コンスターベル
 「砲手長は第一甲板の下の帆柱と舵の間に居室をもつ。かれはつねに大檣の前に坐して、昼夜、船長の方を注目し、船長が笛を鳴らして号令したならば、ただちに砲手らを指揮して大砲の発射準備にとりかかる。また、大砲およびそれに付属する諸道具を管理し、これを調整する」(『東方案内記』639～640頁)。

精製を行なわせるためである。食糧と武器とはまとめてヌーノ・ヴェーリョの居所のそばに取り分けられた。我らの一行は油断することなくこれの監視に努めたが、そのねらいはカフル人による略奪や襲撃を防止することにあつた。同じ目的で、場所と時間とが許す限り、りっぱに塹壕を掘った。そしてくつろいで過ごせるよう天幕を張った。その天幕には、カンバイアとオディアス⁵⁵の豪華な絨毯を広げ、贅沢なギンガム⁵⁶のベッドカバーを敷き、さらにマルディヴァ〔モルディヴ〕の生地⁵⁷や^{むしろ}で天幕を飾りつけた。むろんこれらの品々はこれとは異なるいろいろな用途のために船積みされたものであつた。この天幕の中で我らは夜寒と日中の陽射しをどうにか凌いだ。

Março. xxvj. [26 de Março]

Saluos da Nao S. Alberto pello modo ditto os Nossos ao seguinte dia xxvj. de Março, pediolhes o Capitão, que fossem recolher as Armas, & Mantimentos que achassem, o que logo se fez hindo aos pedaços da Nao, o Mestre, & o Cõtramestre cõ to/fol.19/da a Gente do Mar, & á praya os soldados: estes trouxerão tres Barris de Polvora, & os outros doze Espingardas, algũas Rodilas⁵⁸, & Espadas, tres Cadeirões, & hũ pouco de Arroz. A Polvora se entregou aos Bõbardeiros (dãdo o cargo de Cõdestabre ao mais experimentado) pera que a enxugassem, & refinassem, cõ hũ Barril de vinagre, que veyo á praya, & os Mantimentos, & Armas, se poserão ao lôgo da estãça de Nuno Velho vegiãdosse tudo dos Nossos cõ muito cuidado, por se assegurarem dos roubos, & assaltos dos Cafres. E ao mesmo fim, se atrincheirarão o melhor que o sitio, & o tempo permitia, & pera se agasalharem, fizerão tendas, de boas Alcatifas de Cãbaya, & Odiaz, de ricas Colchas, de Guingoens, Cachas, & Esteiras de Maldiva, que se embarcarão pera bem diferentes usos, nas quaes se recolhião do frio da Noute, & do Sol de dia.

【3月27日】翌日すなわち27日、ただちにカピタン・モールの選出を行なうことが取り決められた。ついで兵士の指名により10名の選挙人が選ばれた。すなわち、カピタン・ジュリアン・デ・ファリーア、フランシスコ・ダ・シルヴァ、ジョアン・デ・ヴァラダーレス、フランシスコ・ペレイラ・ヴェーリョ、ゴンサーロ・メンデス・デ・ヴァスコンセーロス、ディオゴ・ヌーネス・グラマーショ、アントニオ・ゴディーニョ、フランシスコ・ヌーネス・マリーニョ、ペドゥロ師、それにパンタレアン師であ

⁵⁵ 原綴り“Odiaz”。オディアスが地名であるカンバイア(インド亜大陸西北部のグジャラート王国)と併記されていることから、この語彙もまた地名であるかのような印象があるが、たぶんそうではあるまい。アントニオ・セルジオはシャム王国の首都であったアユタヤ(Aituaia)ではないかと注記している(cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, II, p.28, nota)が、どうであろう。ボクサーは、これはインドで用いられた特殊なポルトガル語の語彙“odiá”もしくは“adiá”のことであろうと推定する。「目上の者へ差し出す贈り物」の意。Cf. S. R. Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, I, p.11. 語形的にはこの解釈が妥当だろうと思うが、すっきりとした訳文を作れぬ憾みが残る。

⁵⁶ 原語“Guingoens”。薄地の平織り縞木綿。軽く通気性があり、実用的な夏服地。フランスのギンガムで初めて織られたことに由来すると、マレー語の縞(ging-gang)に由来するともいう(『広辞林』)。語源・用例については、cf. Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, I, New Delhi, Asian Educational Services, Reprint: 1988, First Published: 1919, pp.449-450)。

⁵⁷ 原語“Cachas”。ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』所収テキストに“caixas”(箱)と見えるのは明らかな校訂ミス。初版本に遡り初めて正しい解釈が得られることの一例。ダルガードの説明によると「未加工の布」(Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, I, pp.163-164)。「熱帯地方の住民が身につける腰巻・下帯」(“loincloth”)を意味するヒンディー語“kach”に由来する語彙と見なす説もある(cf. Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.122, note 3)。

⁵⁸ 初版本ではこのように読めるが、“Rodelas”が正しい語形か。海賊版には“Rodelas”とある。

る。一方、水夫はピロットとメストレを選挙人に指名した。彼らに対し一同は全権を委任することにし、彼らによって行なわれる選挙がいかなる結果に終わろうとも、その結果には異議を唱えぬことが宣誓のうで義務づけられた。そして誰がカピタン・モールに選出されようとも、その人物には必ず服従することを約束しあつた。その結果、全員一致でカピタン・モールに選ばれたのがヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラであった。その高潔な人柄、思慮の深さ、勇気と豊富な経験を買われてのことである。しかし彼はこの選挙結果を受け入れず、カピタン・モールの責務はこれをカピタンのジュリアン・デ・ファリーアに与えて欲しいと皆に願つた。ナオの難破時に示された彼の有能さや、誤りのない行動を見ればわかるとおり、彼こそがその責務にふさわしい。彼がその責務に就くならば、私はわが年齢相応に望まれ、かつ期待されるはずの助言をもってジュリアン・デ・ファリーアを助ける。私はこのことを約束する、というのがヌーノ・ヴェーリョの言い分であつた。一同はヌーノ・ヴェーリョの言い分を聞き容れなかつた。これ以上いかなる言い逃れもさせぬよう、一同がヌーノ・ヴェーリョに言うには、もしも貴殿がこの責務を引き受けぬなら、我らはお互いに別れ別れとなり、思い思いの道を好き勝手に、しかもてんでばらばらに進むことにしようと思意しているのだ、と。このような彼らの決意こそ、一行の全面的破滅を意味するものであつたから、それが実行に移されぬよう、ヌーノ・ヴェーリョは、一同全体の利益を自分自身の休息に優先させ、この責務を引き受けた。そしてしかるべき宣誓をもって自分に課された義務の遂行を約束し、一同もまた類似の宣誓をもってヌーノ・ヴェーリョに対する服従を約束した。

xxvij. [27 de Março]

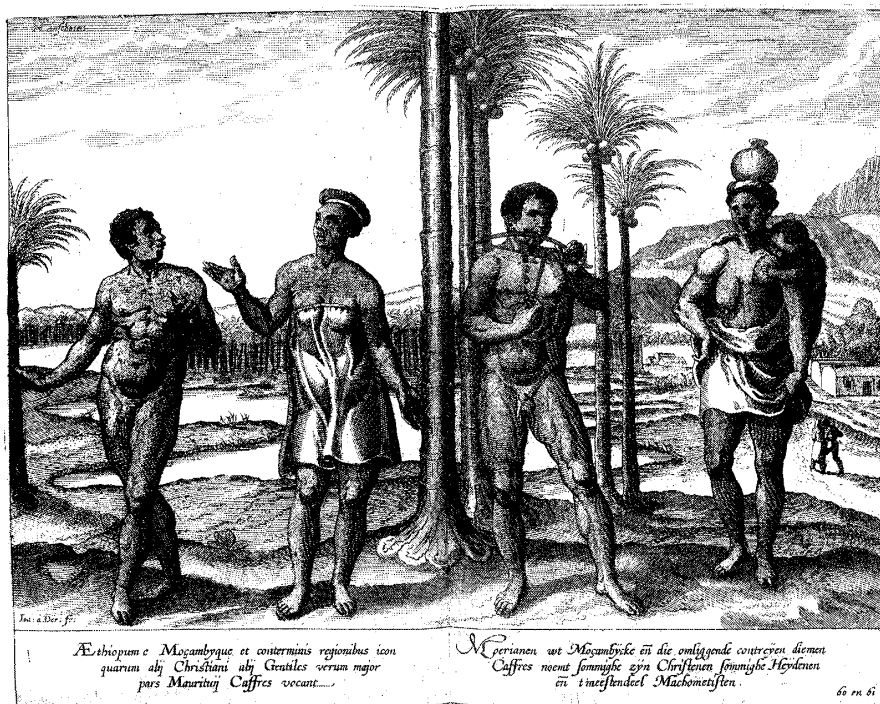
Determinou-se logo ao outro dia, que forão vinte & sete, eleger Capitão mór, pera o que nomearão os soldados dez eleitores, que forão o Capitão Iulião de Faria, /fol.20/ Francisco da Silva, João de Valadares, Francisco Pereira Velho, Gonçallo Mendez de Vasconcellos, Diogo Nunez Gramaxo, Antonio Godinho, Francisco Nunez Marinho, Fr. Pedro, & Fr. Pantalhão, & a Gente do Mar ao Piloto, & ao Mestre: aos quaes derão todos largo poder, & com juramento se obrigarão, hauer por boa eleição, que por elles fosse feita, prometendo de obedecer a quem nomeassem. E de comun consentimento foy eleito por elles Nuno Velho Pereira por sua nobreza, prudencia, esforço, e experiencia. Recusou elle a eleição, pedindo á todos, que se desse o cargo ao Capitão Iulião de Faria, que por suas partes, & bom procedimento na perdição daquella Nao o merecia, & no qual elle prometia ajudalo, com o conselho, que da sua idade se devia querer, & podia esperar. Não aceitarão a Nuno Velho esta escusa, & porque não dêsse outra nenhũa, lhe disserão, que não aceitando elle o cargo, determinavão apartarse, & fa/fol.21/zerem seu caminho desunidos, & em Magotes, por onde, & como melhor pudessem, & como esta resolução, era a total perda desta Gente: porque se não effectuasse, antepondo elle o bem publico ao descanso proprio, o aceitou, & com o devido juramento prometeo cõprir suas obrigações, & todos com outro semelhãte de o obedecer⁵⁹. †

すでに午後になって潮が引くと、何人かの水夫が難破したナオにメストレと一緒に向かった。そして6丁のエスピンガルダ銃、12本の手槍、3袋の米を持ってきて、すべてをヌーノ・ヴェーリョへ引き渡した。ヌーノ・ヴェーリョはこれを乾かすよう命じ、これらを他のものと同様全員のあいだで平等に分配するよう命じた。何か役に立ちそうなものが別に見つからぬかどうか調べるため、その夜はナオの残骸

⁵⁹ “Obedecer” に前置される “o” は直接目的格であるから、ここで “obedecer” は他動詞として用いられていることが判る。ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』所収テキストはこの動詞を、現代ポルトガル語と同様、自動詞とする。間接目的格の “lhe” に校訂されているのはそのため (cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, III, p.29)。

に向かって明々と焚き火が焚かれた。これは類似の事態にあつては必ず行なうべきことだ。そのねらいは、わが同胞が物々交換に必要な釘類を自分の手もとに置くことで、わが同胞の手を経ぬ限り釘類が黒人の手に渡らぬようにすることにある。こうすればつまらぬ釘のたぐいにもしかるべき価値を持たせておくことができる。使い物になりそうもない釘類であれ他の何であれ、それを海へ投棄するときには、黒人の目にふれぬ時間を見計らい、黒人がそれを拾い集めにこぬような場所を選ばねばならない。というのは、もしも釘類を今回そうしてあったように浜辺に放置しておく、後ほどカフル人が家畜を連れて物々交換にやってくる、浜辺に釘類が放置してあるのを見れば、彼らは家畜を売ろうとする気をなくし、せっかく連れてきた家畜も連れて戻ってしまうからだ。彼らにすれば、ウシやヒツジと引き換えに手に入れたいと願っている鉄具が労せずして自分のものになる、と考えられるわけだ。

† Sendo ja tarde, & Maré vazia forão á Nao algũs homens do Mar com o Mestre, & trouxerão seis Espingardas, doze Piques, & tres Fardos de Arroz, o que tudo se entregou a Nuno Velho, & elle o mandou enxugar, pera com o mais, se repartir, com igoaldade entre todos, & pera se descobrir algũa outra cousa, se deu fogo aquella noute ás reliquias da Nao. O que se deve fazer em semelhantes sucessos, pera se aproueitem os nossos da pregadura, pera o resgate, & que a não possaõ haver os Negros, senão da sua mão, & assi tenha a valia necessaria, & a que não for de seruiço deitasse no Mar á tempo que o não vejão /fol.22/ os Negros, & onde della se não possaõ aproveitar: porque deixãdosse na praya, como esta ficou, quando depois vierão os Cafres resgattar Gado, vendoa nella, o não quiserão vender, & com elle se tornarão, entendendo, que brevẽmente serião senhores do Ferro, pello qual trocavão as suas Vacas, & Carneiros.



カフル人

リンスホーテン『東方案内記』に収められた挿絵。下部のキャプションには「モサンビークおよびその周辺の諸地方の黒人たちで、彼らをカフル人と呼ぶ。キリシタンもいるし、ゼンチョ〔ムスリム以外の異教徒〕もいるが、大半はマホメットの信奉者だ」とある。Jan Huygen van Linschoten, *Itinerário, Viagem ou Navegação para as Índias Orientais ou Portuguesas*, ed. Arie Pos & Rui Manuel Loureiro, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1997 より



黒人

狩野派の絵師が描いた『南蛮人渡来図屏風』(16世紀末か17世紀初, 南蛮文化館蔵)に見える黒人。長崎入港後, 船荷を陸へ運ぶ舁を漕ぐ。躍動的な肢体。白い歯を見せてニッと微笑む。東南アフリカのポルトガル勢力圏から連れてこられた「カフル人」に違いあるまい。松田毅一編『探訪 大航海時代の日本 1 南蛮船の渡来』(小学館, 1978年)より

【3月28日】翌日の夜明け, ヌーノ・ヴェーリョはカピタンを浜に遣った。またメストレにも数人の人数をつけてナオへ送った。彼らはそこでモスケッテ銃3丁とエスピンガルダ銃4丁, それに米2袋と, 1クアルトの肉, さらに2クアルトのブドウ酒, 4つの容器に入ったパンと, 多少のオリーブ油と少なからぬ砂糖漬けを見出した。昼食後, 彼らはカピタン・モール所有の大きな箱を見つけた。その中にはおびただしい数の金製品・銀製品が入っていたし, 幾つかの小さな文机には水晶製のロザリオがいっぱい詰まっていた。これらすべてがカピタンに手渡され, カピタンがこれをヌーノ・ヴェーリョへ手渡した。いっさいはヌーノ・ヴェーリョの命によって嚴重に保管され, 人々は食糧の配給にあずかった。

xxviii. [28 de Março]

Amanhecendo ao outro dia, mandou Nuno Velho o Capitão á Praya, & o Mestre com algũs homens á Nao, onde acharão tres Mosquetes, quatro Espingardas, dous Fardos de Arroz, hum quarto de carne, dous de vinho, & quatro jarras de Pão, & algum Azeite, & muitas conservas. E depois de jantar acharão hum caixão do Capitão mór de muitas peças de Ouro, & Prata, & algũs Scrittorios pequenos cheos de Rosarios de Christal, entregousse tudo ao Capitão, & elle á Nuno Velho, & por seu mãdado se goardava, & do mantimento se provia a Gente. †

すでに午後であったが, この地方の首領は, 配下のカフル人の一部を通じて, 我らが同胞の滞留を知

り、60人ばかりの黒人を連れてカピタン・モールを訪ねてきた。首領が近づくと、カピタン・モールは立ち上がり、数歩進み出て、彼を迎えた。黒人の首領は「ナニャター・ナニャター」と言って挨拶した後、平和と友情のあかしとして、カピタン・モールの顎鬚に手を置き、手でその顎鬚を揺さぶったうえ、揺さぶったその手に接吻してみせた。その他の蛮人も皆、その独特の礼法をわが一行にそれぞれ行なったので、わが同胞も同じ礼法を彼らへ返した。この黒人の首領はルспанセと呼ばれ、りっぱな体格であり、容姿に秀で、顔つきは陽気であり、肌はあまり黒くなく、顎鬚は短いものの、口髭は長い。一見したところ45歳くらいである⁶⁰。

† Sendo ja tarde, & sabendo o Senhor daquela terra por algũs dos seus Cafres, que /fol.23/ estavam nella os Nossos, veo visitar ao⁶¹ Capitaõ mór com algũs sessenta Negros. Chegando ja perto delle, se levantou, & andando poucos passos o recebeo, & o Negro depois de o saudar dizendo Nanhatá Nanhatá, em sinal de paz, & amizade, lhe deitou a mão á Barba, & correndoa por ella beijou a mesma mão, & a propria cortesia forão fazendo todos os outros Barbaros aos Nossos, & os Nossos á elles. Chamavasse este Negro Luspãce, era de boa estatura, bem feito, de rosto alegre, não muyto Negro, a barba curta, & os bigodes lōgos, & de quarenta & cinco annos ao parecer.

ヌーノ・ヴェーリョと黒人の首領〔ルспанセ〕とのあいだで前記の礼法が取り交わされた後、両人は絨毯の上に腰を下ろした。両者のかたわらには、わが一行の側からふたりの奴隷が待った。ひとりはマヌエル・フェルナンデス・ジランの奴隷で、当地のカフル人の言葉がわかるうえモサンビークの言葉を話す。もうひとりはアントニオ・ゴディーニョの奴隷で、こちらはモサンビークの言葉ができて、わが言語〔ポルトガル語〕を話す。こうしてふたりの通訳によって両者は意思の疎通を図った。ヌーノ・ヴェーリョはこのカフル人に対し、私の兵士について貴殿はどのような印象をお持ちか、と尋ねた。首領は答えていわく、大変結構な印象である。というのは、彼らの体つきはどこをとってもわが配下どもとさしたる隔たりがないからだ。まったく貴殿の兵士らは肌の白さゆえに太陽の子である。それはさておき、私としては、貴殿らがいかにして当地へやってきたのか知りうればたいへん嬉しい、と。この疑問へ答えるためヌーノ・ヴェーリョは次のように述べた。我らは地上でもっとも強大なイスパニア・ポルトガル国王の臣下である。この国王に対し全インディアは服従しかつ貢ぎ物を納めている。インディアには国王の名代である副王が駐在しており、かの地を治めている。私自身、そのインディアから祖国ポルトガルへ向かいつつあるのだ。航海に用いたのは1隻の大型ナオ〔サント・アルベルト号〕である。ここにいる我らは全員この1隻に収容されていた。実のところ、ここにいる一行とほぼ同数の者がいたのだが死んでしまった。ナオに穴が開き、荒れ狂う波によって我らは浜へ打ち上げられたのだ、と。この言葉にすべてのカフル人がどよめきの声を上げた。

Depois que se fizerão entre Nuno Velho, & o Negro as cerimoniaas dittas, assentarãoosse ambos em hũa Alcatifa,

⁶⁰ 「ルспанセの種族がバントゥーとホッテントットの混血である——ただし前者のほうが卓越している——ことは、この記述から明白である」(‘From this description it is evidente that Luspance’s clan was of mixed Bantu and Hottentot blood, the former, however, prevailing.’ George McCall Theal, *The Beginning of South African History*, p.297. Apud. Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.120, note 1)。

⁶¹ 海賊版もゴメス・デ・ブリット『海難悲話』所収テキストも、前置詞“a”を省く(cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, III, p.29)。“Visitar”(初版本テキストでは“vesitar”)は他動詞であるから、目的語との間に前置詞は本来不要であるが、行為・行動・動作の対象である目的語との関係を強調する場合、現代ポルトガル語でも、他動詞と目的語との間に前置詞“a”を挟むことがある。

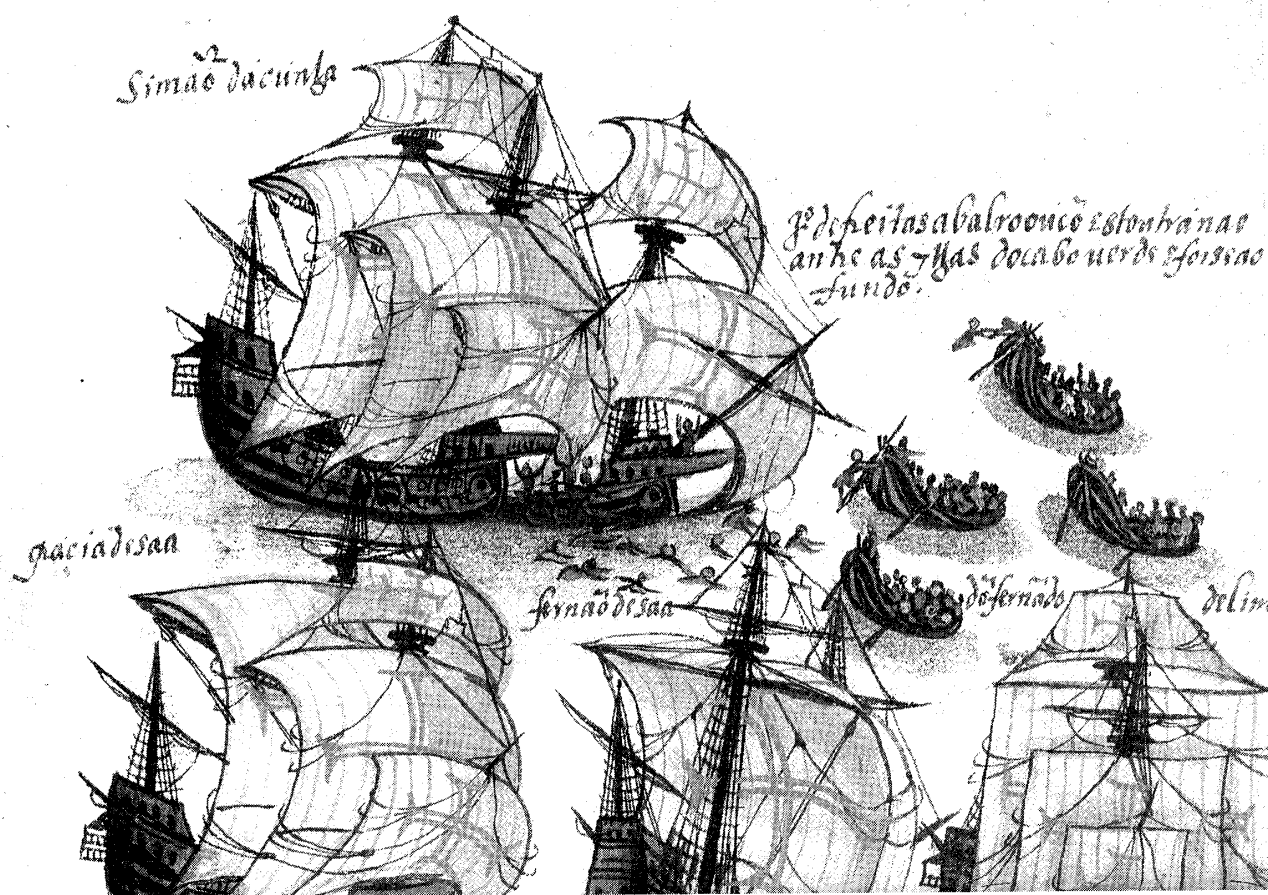
& jũto delles dous escravos dos Nossos. Hũ de Manoel Fernãdez Girão, que entendia a lingoa destes Cafres, & falava a de Moçambique, & outro de Antonio Godinho, que sabia esta, & falava a nossa, & assi com dous interpretes, se comunicavão. Perguntou Nuno Velho /fol.24/ á este Cafre que lhe parecião aquelles seus soldados, ao que respondeo, que muito bem, porque tinham todas as feições do corpo, ás suas semelhantes, & que erão filhos do Sol (por serem brancos) mas que folgaria saber como vierão ter ali. Satisfez á esta pergunta Nuno Velho dizendo, que erão vassallos do mais poderoso Rey da terra, a quem obedecia, & pagava tributo toda a India onde estava hũ seu Visorrey, que a governava, & da qual vindo elle pera Portugal sua Patria, em hũa grãde Nao, que recolhia toda aquella Gente, & outra tanta que era ja morta, o Mar com sua furia, os havia deitado naquella prava⁶² abrindosse a Nao, de que todos os Cafres se admirarão.

以上に続いて王からの贈り物が出てきた。王が我らへふるまったもので、オルムス種の大型のヒツジ2頭がそれであった。2頭はただちに屠られ人々のあいだに分配された。黒人の王は2頭が屠殺されたのを見ると、配下の別のカフル人を連れてその皮が剥がれている現場へ行き、この男に命じて、ヒツジの胃袋から引き出された汚物を取ってこさせた。王は感謝の儀式とともに、その気持ちを言葉にしつつ、汚物を手ずから海へ投げ入れた。海こそが自分のもとへポルトガル人を運んでくれたから、というわけである。実際、この黒人は我らの遭難につけいって大きな利益を引き出そうともくろんでいた。さながら親友に対するがごとく、海へかの御褒美を与えかつこれを海へ捧げたのには、それなりのわけがあったのだ⁶³。

Seguiu á isto hum presente, que lhe fez este Rey de dous Carneiros grandes de casta de Ormuz, os quaes logo se matarão, & repartirão pella gente, & vendoos o Negro mortos se foy, com outro seu Cafre onde os esfolarão, & mandoulhe tomar da immũdicia, que se tirara dos Buchos, /fol.25/ & com sua mão a deitou no Mar, com cerimonias, & palauras, de agradecimento, por lhe trazer á sua terra os Portugueses, de cuja perda, esperava elle grãde ganho: pello que como á amigo seu, lhe dava, & offercia aquelle presente.

⁶² 初版本には“prava”と誤記されるが、海賊版では“praya”(“praia”に同じ)と訂正される。

⁶³ 「これは南アフリカのバントゥー族が生贄を捧げる際、ほとんどのケースで行なわれる祭儀にほかならない。海のそばに埋葬される先祖の諸霊を呼び覚ます行為であり、先祖の諸霊は、多かれ少なかれ、海そのものが有する人を超えた力と融合しているのだ。この祭祀は、純粋に祖霊へ捧げる生贄の役割と、自然へ捧げる生贄のそれが転移しあうことを示している」。この汚物を海へ投じた男は「疑いもなく家族の祭祀を司る僧である」(‘This is exactly the rite which takes place in most of the sacrifices of South African Bantu. It is an invocation to the spirits of the ancestor, who are buried near the sea, and are more or less confounded with the impersonal power of the sea itself, this rite showing the transition between a purely ancestrolatric and a nature sacrifice.’ The man who threw the refuse into the sea was ‘no doubt the priest of the family.’ H. A. Junod, “The condition of the natives in South-East Africa in the sixteenth century, according to the early Portuguese documents” in *The South African Journal of Science*, February, 1914. *Apud.* Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.121, note 1)。



描かれた難船（その1）

右上のキャプションには「ジョアン・デ・フレイタス[のナオ]が、カーボ・ヴェルデ諸島の近辺で別のナオに衝突、沈没した」（‘Jº de freitas abalroou cõ estoura nae anhe as ilhas do cabo verde e foise ao fundo’）とある。ジョアン・デ・フレイタスはインディア総督ヌーノ・ダ・クーニャの船隊（1528年）に参加。Livro de Lisuarte de Abreu (Pierpont Morgan Library, New York), fol.47. Livro de Lisuarte de Abreu, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1992 より

以上のことを行なうと、黒人の首領はヌーノ・ヴェーリョのもとへ戻り、彼から菓子とブドウ酒のふるまいを受けた。ブドウ酒とやははなかなかうまいではないか、と首領は大いに褒めた。ブドウ酒を口にしたことによって腹が温まるように感じ、どうやら腹のためには結構なものと首領には思われたのである。そろそろ去ろうとした首領へカピタン・モールは釘をいっぱいにつめた真鍮製の椀と、金粉を置いたシナ製の文箱を与えた。この贈り物に首領はたいそう満悦した。首領は最初に迎えられたときと同一の礼法でもって、カピタン・モールおよびその他のポルトガル人に別れを告げた。その場を去るに際して首領は、翌日、配下の者からひとり選んで派遣しようと約束した。その男が水のある場所を教えるだろうと言い添えた。水といえはわが仲間はひどい渇きに苦しんでおり、そのときまでは浜に打ちあげられた樽の水を飲み辛うじて渇きを癒していた。ただその水は海水が混入して少々塩辛かった。

O que feito se tornou á Nuno Velho, de quem foy convidado com doce & vinho, que gabou muito, parecendolhe cousa boa, pera a barriga, sentindoa⁶⁴ quente, com elle. E querendosse hir lhe apresentou o Capitão Mór hũa Bacia

⁶⁴ 海賊版では“sentidoa”と誤記。初版本における正しい表記のように、現在分詞を用いなければ意味がとれない。

de Latão chea de Prégos, & hum escritorio dourado da China, com que o Negro ficou muy contente, & despedindosse delle, & dos mais Portugueses, com a mesma cerimonia, com que se receberão, se foy promettendo mandar ao outro dia, hum seu homem, que ensinasse onde havia Agoa, de que os nossos tinham ja necessidade, bebendoa té aquelle tempo das Pipas, que deitou o Mar na praya, posto que algum tanto salgada com a mistura das ondas.

当地のカフル人の衣裳は仔ウシの皮で作った、頭髪を外へ出すようにした大きな外套である。彼らは仔ウシの皮を柔らかくするためグリスをこれに塗る。彼らの靴は、なめしていない革の靴底2~3枚でできており、この靴底が互い違いに貼りあわされていて、丸みを帯びた形である。その靴底を革ひもによって脚に結びつけ、それでもって彼らは大変な速さで走る。彼らは手に手に細い棒を持ち、その棒にはサルあるいはキツネの尾が巻きつけてある。その尾を用いて彼らは体をきれいにし、遠くを眺めるため目許に影をつくる。このような装束は当カフラリーアの黒人ほぼすべてが纏うもので、彼らの王や要人は左の耳にそれぞれのやり方でこしらえた舌のない銅製の鐘をぶら下げている。

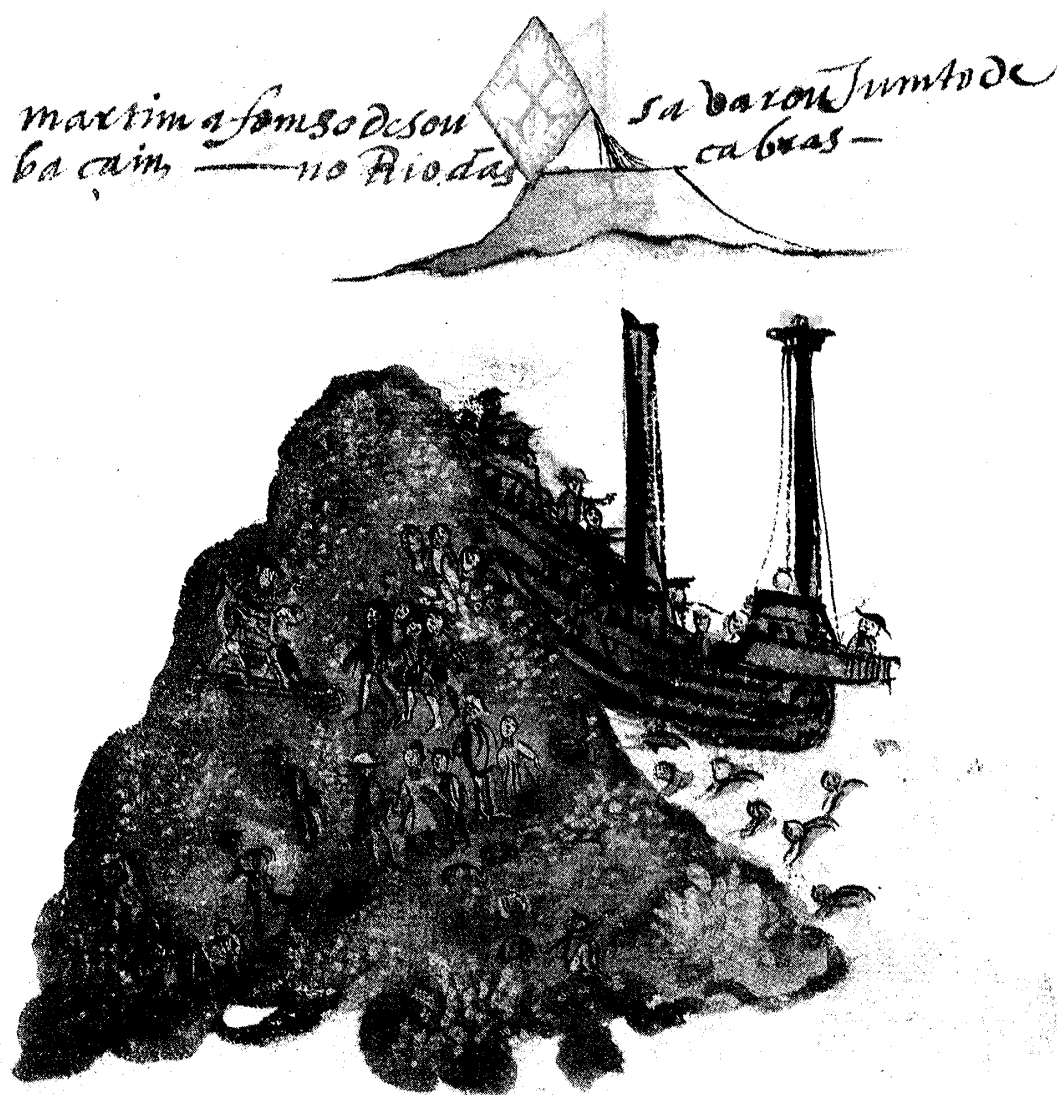
Era o vestido destes Cafres hũ mantão /fol.26/ de péles de Bezorro, com o cabelo pera fóra, as quaes vntão com grassa⁶⁵, pera serem brandas: o calçado de duas, & tres solas de Couro cru, pegadas hũas nas outras, de forma redonda, nas quaes anda o pee atado com correas, & com elle correm com grande ligeireza, trazem na mão, em hum delgado pao, emburilhado hum cabo de Bugio, ou de Raposa, com que se alimpão, & fazem sombra aos olhos para ver. Vsaõ deste trajo, quasi todos os Negros desta Cafraria, & os seus Reys, & Principes, trazem pendurada na orelha esquerda hũa Campainha de Cobre, sem badalo, que elles fazem ao seu modo. †

当地のカフル人もその他すべてのカフル人も牧人や農夫であり、牧畜や農耕を生業としている。農産物はトウモロコシであるが、それは白くて大きさはコショウの実くらいであり、形も大きさもヨシにそっくりな植物の穂に実をつける。このトウモロコシをあるいはふたつの石に挟み、あるいはすりこぎで挽いて粉にし、その粉から菓子を作る。菓子はトウモロコシの粉を埋め火に置いて焼き上げる。トウモロコシの粉からは酒〔ビールというほうが事実に近い〕も造る。その粉を多量の水と混ぜ合わせ、そうしてできた液体を粘土製の器の中で煮立て、冷やして酸っぱくなった後、彼らはこれをおいしそうに飲む⁶⁶。

† São estes, & todos os mais Cafres Pastores, & Lavradores, & disso vivem, a Lavoura he de Milho, o qual he branco, do tamanho de Pimenta, & dalle em hũa Maçaroca de hũa Planta da feição, & tamanho de Caniço. Deste Milho moido entre duas Pedras, ou em Pilões de pao, fazem farinha, & della bolos, que cozem no borralho, & da mes/fol.27/ma fazem vinho, misturandoa cõ muita Agoa, a qual depois que ferue em hũ vaso de barro, & se esfria, & azeda, bebem com grande sabor. †

⁶⁵ 現代語の綴りでは“graxa”。

⁶⁶ 南アフリカにはバントゥー系アフリカ人のほかコイサン人と総称される先住民が住んでいたが、「コイサン人との決定的な相違は、(バントゥー系)アフリカ人が鉄器や陶器を使い、農耕を行っていたことである。穀物としては主としてソルガム(もろこし)が栽培されたが、これは粉にしたものを水で練って食用にされたし、ビールの原材料にもなった(現在ではソルガムのかわりにとうもろこしが広く栽培されている)。(峯陽一『南アフリカ——「虹の国」への歩み』岩波新書、1996年、67頁)。



描かれた難船（その2）

キャプションには「マルティン・アフォンソ・デ・ソウザ，バサイイン[バッセイン]附近，カブラス河にて座礁」(‘martim afonso de souza varou junto de baçaim - no Rio das cabras’)とある。マルティン・アフォンソ・デ・ソウザはインディア総督として1541年の船隊を指揮。 *Livro de Lisuarte de Abreu*, fol.59v.

家畜のウシは多数おり，肥えており，おとなしくて，肉はおいしく，体はたいそう大きい。牧草がきわめて豊かなせいである。大部分は無角であり，しかもその大多数は雌である。彼らにとって財産が豊かであるかどうかはどれだけ多くの雌ウシを持っているかによって決まる⁶⁷。雌ウシから得た乳や，その

⁶⁷ ラヴァーニャの記事に現われる南アフリカの先住民，すなわちバントゥー系アフリカ人にとって「最も重要な財源は，牛であった。牛は農村生活のシンボルであり，何とでも交換できる貨幣であった」(峯陽一『南アフリカ——「虹の国」への歩み』67頁)。

乳から作るバターで彼らは身を養う。

† O Gado he muito, gordo, tenro, saboroso, & grande, (sendo os pastos grossissimos) o⁶⁸ mais delle Mocho, & a mayor parte, saõ Vacas em cujo numero, & abundancia, consistem as suas riquezas, & sustentãoosse do Leite dellas, & da Manteiga, que delle fazem. †

彼らは小さな部落に固まって住んでいる。部落の家々はヨシの藁でできており、雨は防げない。家々は丸くて低い。家の中で誰かが死ぬと、ただちに他の連中は家ばかりか部落全体を取り壊してしまう。そして同じ素材を用いて別の家々を別の場所に造る。部落で隣人や縁者が死ぬと、何かにつけ不幸が降りかかるものと、彼らはそう信じているのだ。そのようなわけで、彼らは難儀な目に遭わぬよう、誰かが病気を患えば、その病人を森へ運び入れる。死ぬに違いない病人なら、そうしてその死を屋外で迎えるようにさせる⁶⁹。家々はひとつの垣根によって取り巻かれており、その垣根の中に家畜を収容する。彼らは動物の皮にくるまり、地べたの、長さ 6~7 パルモ、高さ 1~2 パルモの狭い穴の中で眠る。彼らは太陽で乾かした粘土の器を用いる。また、鉄の鉋で彫った木の器も用いる。この鉋であるが棒の中に打ち込まれた楔くさびのような形をしている。この鉋は木を切るのに用いる。いくさのときにはアザガイア〔手槍〕を使う。彼らは去勢されたイヌを飼い、これは形といい大きさといい、わが大き目のゴーズ⁷⁰のようである。彼らはまったく野獣同然であり、何物も崇拜しない。彼らがいともたやすく我らがキリストの聖法を受け入れるであろうことに相違はない⁷¹。彼らの信ずるところによれば、空は我らが現に生きてい

⁶⁸ 海賊版では“o o”と定冠詞が無用に2度繰り返される。

⁶⁹ ドミニコ会宣教師ジョアン・ドス・サントスの『エチオピア・オリエンタール』第1部第1巻15章には、ソファアラのカフル人が近い者に対して有する埋葬習俗について記された後、次のような記述が見える。

「このカフル人というのは皆、お互いに不人情であり冷酷である。カフル人の誰かが病気になるとする。そしてこの病者を深く思いやりたり看護の労をとったりする妻女なり親類縁者なりはいないとする。病者は通例、窮迫の末に死んでしまう。というのは、病者のことを気の毒がったり、食を与えたりするカフル人など、ほかには誰もいないからだ。たとえ病者が瀕死の状態であり、飢えや困窮で死が寸前に迫っていると確認されても、事情は同じである。だから、病気になると、普通、それが原因で皆、死んでしまう。彼らは貧しく、暮らしぶりは惨めであり、おまけに、手持ちのいかなる食べ物にも飲み物にも吝嗇なことこの上ないから、それは当然の帰結だ。身寄りのない連中に対してしてやることは、せいぜい次のとおりだ。すなわち彼らを友達か密林へ運び、木や株のたもとにこれを放置する。そのとき彼らのそばに水を入れた鍋と、トウモロコシを少々置いてやる。彼らに余力があれば、これを食べかつ飲むのだ。が、それ以外の配慮はなく、彼らは死んでしまうまで、その場に放置される。カフル人が誰か彼らのそばを通っても、彼らが嘆きの声を上げたり呻いたりするのを目の当たりにしても、これに心を痛めて癒してやろうというカフル人はいない。かかる不人情を当然視するあまり、ほかならぬわが身に残虐行為を働くカフル人もいる。すなわち、病状が重くなり人生の終末に立ち至ったと自覚したら、彼らは人に命じて己を密林へ運ばせる。そして株のたもとに捨て置いてもらい、まるで野獣さながらにわが身を死に至らしめるのである」(Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*, ed. Manuel Lobato et al, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses, 1999, pp.120-121)

⁷⁰ 原綴り “Gozo”. 短い脚と幅広い体躯を特徴とする小型でありふれたイヌ (António de Moraes Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*, 10.^a edição, V, [Lisboa], Editorial Confluência, [1953])。

⁷¹ 初めて遭遇した非ヨーロッパ先住民が宗教的にほとんど無垢である——このように速断すること自体、カトリック的独善というか西欧優越思想の所産にほかなるまいが————ということを根拠に、カトリックの布教が速やかに進捗

るこの世界と同じもうひとつの別世界であり、そこには別種の人々が住んでいるのだという。その人々が走ることによって雷が落ち、小便することによって雨が降るのだそう。南緯 29 度よりも下の土地に住む人々の大半は割礼を施している。彼らはたいそう肉欲的であり、扶養しうる限りの妻を持つ⁷²。妻に

するであろうとする楽観の見通しは、ブラジル先住民に関する報告をヨーロッパ人として初めて行なったペロ・ヴァス・デ・カミーニャによる 1500 年 5 月 1 日付け国王マヌエル 1 世宛ての書翰にも見られる。

「私には、彼ら〔先住民〕はまことに純真無垢な人々であるように思われます。もし彼らの意思がわかるようになり、彼らもまた我らの意思がわかるようになれば、彼らはただちにキリシタンになるであります。と申しますのは、一見するところ、彼らはいかなる信仰も持たず、いかなる信仰にも理解を示さぬからであります。ですから、当地に留まることになる流刑者たちが、彼らの話し言葉をよく学び、その意思を汲めるようになれば、私は信じて疑いませぬが、彼らは、陛下の聖なる御企図に従い、必ずやキリシタンとなり、我らが聖なる信仰に入るであります。彼らが聖なる信仰へ導かれることを、主よ、嘉し給え。確かに、当地の人々は善良そのものであり、麗しき純真さの持ち主であります。〔信仰に関しては〕私たちが与えようと願ういかなる刻印も彼らのうちにやすやすと捺することができます。我らの主は、善良な人々にさよう為し給うが如く、彼らへりっぱな肉体と好ましい面貌をお与えになりました。主が我らを〔そのような人々が住む〕当地へ連れ給うたのは、理由のないことではないと、私はそう信じてやみません」(Jaime Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, Lisboa, Portugalia Editora, 1967, p.250. Cf. *A Carta de Pêro Vaz de Caminha* (Fac-símile e transcrição), ff.11-11v. in *ibid.*; Leonardo Arroyo, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha: Ensaio de Informação à Procura de Constantes Válidas de Método*, São Paulo, Edições Melhoramentos. Em convênio com o Instituto Nacional do Livro – MEC, 1971, p.60. Cf. *A Carta: fac-símile e transcrição diplomática*, pp.106-109 in *ibid.*)

⁷² 南アフリカの先住民であるバントゥー系アフリカ人の間では、「少年が成人になるには、レボッロと呼ばれる成人式の学校を経なければならなかった。一人前になった青年が結婚するための前提条件は、花婿の家が花嫁の家に十分な数の牛を贈ることだった。これはロボラ(またはボハリ)と呼ばれるもので、一種の結納と考えてよい。十分な牛を所有しない者は息子を結婚させることができず、逆に裕福な家の息子は多数の妻を所有することができた」(峯陽一『南アフリカ——「虹の国」への歩み』67～68頁)。

ドミニコ会宣教師ジョアン・ドス・サントスが『エチオピア・オリエンタール』第1部第1巻15章にソファアラのカフル人の婚姻習俗を説明しているので、訳出してみる。

「この地方のカフル人たちは結婚相手となる妻をその両親から買う。そしてその妻と引き換えに、妻の両親へ雌ウシや反物や数珠や斧を差し出す。それぞれがその身上に応じて、また、もらう妻〔の価値〕に応じてそうするのである。だから、結婚させるにふさわしい娘をたくさん持つカフル人は裕福であり、彼らは多くの娘を抱えて至極満足に暮らしている。彼らには売るべき多く〔の財産〕があるからだ。もし妻との生活に満足しなくなれば、カフル人はこれ売り手〔妻の両親〕へ戻す。しかし妻をもらったとき引き換えに差し出した対価はすべて失う。〔妻を売った〕父もしくは母は離縁されてきた娘を受け入れねばならない。そしてこれをみずからの支配下に置いた後、娘を追出した夫との離縁が初めて成立する。父は、この娘をまたもや売り払ったり他の男と結婚させたりできる。妻のほうから夫との離縁を申し出ることはできないし、夫を放置したり追い払ったりもできない。妻の地位はある種夫の奴隷のようなものであり、妻にはそれだけの元手がかかっているから、というのが夫側の言い分だ。これらカフル人が結婚するときに行なう儀式らしい儀式は、双方が取り決めを交わしあい、結婚当日、盛大な舞踏やらお祭り騒ぎやら遊戯やらを行なうこと、それだけである。その場には儀式が執り行なわれるその土地にいる住人が皆顔を出す。招待を受けた連中はひとりひとり贈り物を持参する。贈り物とはトウモロコシとか小麦粉、タロイモや種々の穀物やマメ類、そしておのおのに持参可能な、あるいは持参したいと望むその他のものである。以上すべてのものを花婿に差し出す。その日に費やす経費の助けにして欲しいという気持ちである。実際これらの贈り物の大部分はこの日の婚宴で食べる

対してはきわめて嫉妬深い。アンコセと呼ばれる首領に服従する。全カブラリーアにおいて言語はほぼ単一であり、その違いたるや、イタリアの諸方言のあいだ、もしくはエスパーニャで行なわれている日常諸語⁷³のあいだに見られるそれ程度であろう。みずからの居住地を離れることはほとんどない。したがって情報を持っているとしても、せいぜいその隣人に関することどまりである。彼らはたいそう利欲が強く、支払いが完了せぬ限り、物品なり労役なりを提供したりしない。しかし支払いがその提供にさきだって行なわれても、彼らに期待を抱いてはいけない。支払いを受ければさっさと身を隠すからだ。彼らは鉄・銅のようにもっとも有用性が高い金属を重んずる。したがってこれらの金属ならいかに小さなかけらであっても、それを家畜と交換してくれる。家畜こそ、彼らが一番大事にしているものであるにもかかわらず。家畜を元手に交易や商売を行なうのであるから、それこそが彼らの宝だ。金・銀は彼らのもとでは価値がないし、これらの貴金属がこの土地に存するようにも思われない。我らが通過したところどころに関する限り、金・銀のありそうな様子はついに認められなかった⁷⁴。以上が、当地のカフル人の衣裳や習俗、儀礼や掟について観察したことのすべてである。いとも野蛮なこの人々に関して注目

ものの飲むものとして費やされる。ふたりの妻を持ちたいと思うカフル人は誰もそうすることができる。ただしそうするだけの資力があれば、だ。そのようなことができる者はごく僅かにすぎない。というわけで通常、カフル人はふたり以上の妻を持たない。ただし王国の大身貴顕といった連中は例外であり、彼らは多くの妻を持つ。多くの妻の中でただひとりが“大きな”妻、主要なる妻、そしてもっとも尊重される妻である。その他の妻はと言えば、それは情婦か妾のようなものである」(Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*, pp.120-121)

⁷³ 16世紀末のエスパーニャをイベリア半島の全域とすれば、カステイーリャ語、カタルーニャ語、ガリシア語、それにポルトガル語がここに含まれるであろう。ロマンス諸語とは系統をまったく異にするバスク語はここには含まれない。

⁷⁴ ペロ・ヴァス・デ・カミーニャによるマヌエル1世宛て書翰(前出)にも、ブラジルの地に金銀が存在するかどうかを気にかける文言が、複数回現われる。大航海時代、世界各地に足跡を残したポルトガル人に共通する欲望の主たる対象が何であったか、を示唆する記述として興味深い。

「松明に火が灯され、彼ら〔ふたりの先住民〕が〔旗艦に〕入ってきました。しかし礼法らしい仕草は何ひとつしませんでした。カピタン〔カブラル〕にも他の誰にも話しかけるそぶりを見せませんでした。しかし彼らのひとりがカピタンの〔金をあしらった〕首飾りに目をつけ、手でもって陸地のほうを指す仕草をしました。そしてそのあとカピタンの首飾りを指しました。まるで私たちに向かって陸地には金があると言っているかのようでした。彼はまた銀の蠟燭立てにも目をやり、さきほどと同様、陸地のほうを指す仕草をし、続いて蠟燭立てを指しました。まるで銀もあると〔言わん〕ばかりでした」

「彼らのひとりがロザリオの白い数珠玉を見て、くれ、という仕草をしました。彼はこれをひどく喜び、首に巻きました。その後、これを取り外し、腕に巻きました。そして陸の方向を指さし、もう一度カピタンの〔金をあしらった〕首飾りを指さしました。まるでかの首飾りと引き換えに金をやろうと言っているかのようでした。そのような意味にとりましたのは、私どもが金を欲していたからにほかなりません。しかし彼はただ数珠玉と、さらには首飾りを持ってゆきたいと望んでいただけかもしれません。そうであっても私どもはそう解釈したくはありませんでした。それをやってしまうつもりはなかったからであります。その後、彼は数珠玉を貸してくれた人へ返しました」

「私たちは今までのところ、この地に金や銀、何らかの金属や鉄があるかどうか、知ることはできませんでした。またそうしたものを見ることもありませんでした」(Cortês, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, p.227; p.228; p.256. Cf. *A Carta de Pêro Vaz de Caminha* (Fac-símile e transcrição), f.3; f.3; f.13v. in *ibid.*; Arroyo, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, p.47; p.48; p.63. Cf. *A Carta: fac-símile e transcrição diplomática*, pp.74-75; pp.74-75; pp.116-117 in *ibid.*)

に値することはこの程度に違いない。



描かれた難船（その3）

キャプションには「ドン・ディオゴ・デ・ノローニャ、マザガンにて座礁」（‘dom dioguo de noronha varou em mazaguam’）とある。ドン・ディオゴ・デ・ノローニャは副王ドン・アフオンソ・デ・ノローニャの船隊（1550年）に参加。 *Livro de Lisuarte de Abreu*, fol.68.

† Vivem juntos em pequenas Pouoações de casas feitas de Esteiras de junco, que não defendem a chuva, as quaes são redondas, & baixas, & se nellas morre algum delles, logo os outros as desfazem, & toda a Povoação, & da mesma materia fabricão outras em outro sitio, havendo que na Aldea, em que o seu vezinho, ou parente falleceo, soccederá tudo desgraçadamente⁷⁵. E assi por afforrarem o trabalho, quando algum adoece, levãono ao Mato, porque se houver de morrer seja fôra das casas. As quaes cercão de hũa Sebe, & dentro della /fol.28/ recolhem o seu gado. Dormem entre péllles de animaes, no chão, em hũa cova estreita, de seis, & sette palmos de comprido, &

⁷⁵ 海賊版には“desgraçadamente”とある。

de hum, & dous de alto. Vsaõ vasos de barro secos ao Sol, & de madeira lavrados com hũas Machadinhas de ferro, as quaes são como hũa cunha metida em hum pao, & com as mesmas cortão o mato. E na guerra servense de Azagayas, trazem Cachorros capados da feição & tamanho dos nossos Gozos grandes. São muy brutos, & não adorão cousa algũa, & assi receberão com muita facilidade a nossa santa ley Christaã, crem que o Ceo he outro Mundo como este, em que vivemos, povoado de outra Gente, a qual correndo faz os Trovões, & ourinando causa a chuva. Circuncidasse a mayor parte dos que povoão a terra de vinte & nove graos de altura pera baixo, são muy sensuaes, & tem quãtas molheres pódem sustentar, das quaes são ceosos, obedecem á Senhores que chamão Ancosses, a lingoa he quasi hũa mesma em /fol.29/ toda a Cafraria, & he a differença entre ellas semelhante á que ha nas lingoas de Italia, ou nas ordinarias de Hespanha. Alongãose pouco das suas povoações, & assi não sabem, nem tem noticia mais, que dos vesinhos, são muy interesseiros, & em quanto lhe não pagão servem, mas se a satisfação precede ao serviço, não se espere delles, porque com ella se acolhem. Prezão dos Metaes os mais necessarios, como he o Ferro, & o Cobre, & assi por muy pequenos pedaços de qualquer destes trocã o Gado, que he o que maes estimão, & com elles fazem o seu comercio, & commutação, & seus tesouros. O Ouro, & Prata, não tem entre elles preço, nem parece que ha estes Metais na terra, não vendo sinaes delles os Nossos, por onde passarão. Os quaes soo isto notarão dos trajos, costumes, cerimonias, & leis destes Cafres, nem deue haver mais que notar entre tão barbara Gente. †

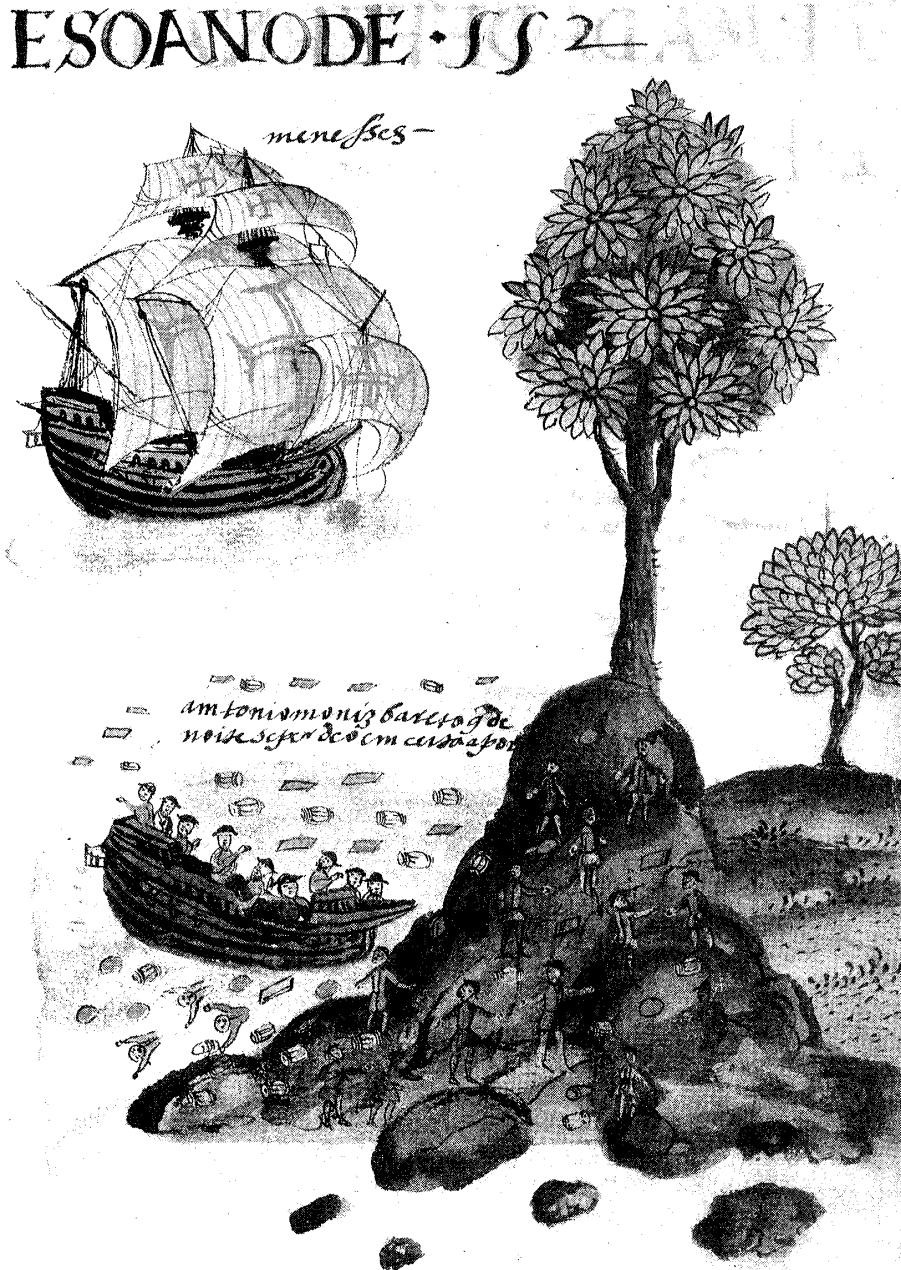
土地はきわめて豊饒であり肥沃である。いたるところでポルトガル人は彼らにも見覚えのある植物を見出した。オレガノ、ヨモギの類、シダ植物、クレソン、メグサハッカ、ゼニアオイ、ローズマリー、ヘンルーダ、大きくて味の良い実をつけたギンバイカ、実をつけたセイヨウセブイチゴ、ローズマリー、ホナガイヌユビ、ヤセイハッカ、アロエなど。このアロエは大きくて堂々たる樹木のように見える。その葉柄は長さにして4〜5パルモあり、幅にして1パルモあった。その真ん中あたりから黄色い花をつけた葉状体を出している。そうしてその他にもたくさんの草があり、それらの草は当地の平原以外では絶えて見られなかった。樹木は我らの樹木とはまったく異なっている。我らのもとにある樹木に似通ったものといえ、オリーブの木——その木もごく小さな実をつけているだけである——、Azãbujeiros〔この語彙、ポルトガルの地名アザンブージャ(Azambuja)の形容詞のようであるが、未詳〕、ナツメの木、それにイチジクの木にも出逢った。

† A terra he abundantissima, & fertilissima, Virão por ella os Portugueses das /fol.30/ Plãtas delles conhecidas, Ouregãos, Losna, Fetos, Agriões, Poejos, Malvas, Alecrim, Ruda, Murta, com grandes, & saborosos Mortinhos, Silvas cõ fruitto, Rosmaninho, Bredos, Mentrastos, & erva Babosa tão alta, & grande, que parecia arvore, cujas pencas erão de quatro, & cinco palmos de comprido, & de hum de largo, & do meyo deitava hum talo cõ flores amarelas; & assi outras muitas ervas, que nunca virão, senão por estes câpos. As Arvores diversissimas das Nossas, & como ellas, soo acharão, Ouliveiras, com muy pequenas Azeitonas, Azãbujeiros, Maceiras de Anafega, & Figueiras.

たいそう大きく鬱蒼^{うっそう}とした密林があり、その中ではライオンやトラ、その他この種の猛獣にはまったく出遭わなかった。毒蛇としてはたった1匹大きなマムシを見ただけであつたが、これは殺した。数匹のヘビに出くわしたがこれは我らのミズヘビのようであり、さらにはトカゲにも出遭った。その他についてはそれぞれが登場するくだりで言及する。河にはきわめて頻繁にぶつかったが、どこにも魚影が認められた。より深く考察すべきことがらはそれぞれの箇所において論及するであろう。上記のことはカ

フラリーア全土において広く該当することであり、それをここに書きとめておくのは、この行進の記録においてこれから論ぜられるであろうことがらの理解をより深めてもらう助けとしたいからである。

Tem grandes, & espessos Bosques, nos quaes nunca se encontrarão Liões, Tigres, nem animaes desta qualidade. Dos peçonhentos viosse hũa só Bibora grande, que se matou, & algũas Cobras como as nossas de Agoa, & Lagartixas: & dos outros se dira onde se acharão. Nas Ribeiras que são muitas, enxergarãosse Peixes, & do que mais for de consideração, se dara no/fol.31/ticia em seu devido lugar, dandosse neste a universal de toda a Cafraria, pera melhor se entender, o que della se for trattando na relação deste caminho.



描かれた難船（その4）

キャプションには「アントニオ・モニース・バレット、夜間、セイタポール[インド亜大陸西岸]にて遭難」('amtonio moniz bar[r]eto que de noite se perdeu em ceitaapor')とある。アントニオ・モニース・バレットはフェルナン・ソアーレス・デ・アルベルガリーアの船隊(1552年)に参加。Livro de Lisuarte de Abreu, fol.70.

【3月29日】さて本来の記述に戻る。翌日すなわち3月29日の朝、カピタン・モールには、かのささやかな一団をよりよく統率するため（ささやかな、と言うのは、よき統率なしには、こんな一団の秩序などそう長く保てるものではないからだ）、しかるべき将校を数名選び出しておくことが必要であるように思われた。カピタン・モールは、一団を統括しかつ部署割りを行なうその権限をカピタンのジュリアン・デ・ファリーア・セルヴェイラへ与えた。ディオゴ・ヌネス・グラマーショはプロヴェドール〔補給係〕に任じられ、メストレのジョアン・マルティンスはテゾウレイロ〔出納係〕に任じられた。さらに彼は以下のように命じた。すなわち、この両名はペドゥロ修道士と協力して金製品や銀製品、それに物々交換に必要ないろいろな品を保管する責任をまっとうするように、さらに物々交換の現場には必ずアントニオ・ゴディーニョが立ち会うように、と。アントニオ・ゴディーニョはカフル人との交易に多大の経験を有し、クァマの諸河川⁷⁶でカフル人相手の商いに従事すること久しいから、というのがその理由であった。

xxix. [29 de Março]

Ao qual tornando, como foi menhaã do dia seguinte vinte & nove de Março pareceo ao Capitão mór necessario, pera o bom governo daquelle pequeno Arrayal (pois sem elle se não póde conservar cousa algũa muito tempo) elegerense os necessarios officiaes delle, & assi deu o cargo de o ordenar, & destribuir ao Capitão Iulião de Faria Cerueira, Diogo Nunez Gramaxo nomeou pera Provedor, & João Martinz o Mestre pera Tesoureyro, & mandou que ambos tevessem á sua conta a goarda das peças de Ouro, & Prata, & das mais cousas do resgate, em companhia de Frey Pedro, & se fizesse presente Antonio Godinho, por ser homem, que tinha muita experiencia do Comercio dos Cafres, com os quaes trattara muito tempo nos Rios de Cuama. †

カピタンのジュリアン・デ・ファリーアは一団を主な部署に分けた。すなわち前衛、戦闘本隊、後衛である。さらに彼は、警戒要員として兵士たちを3つの部隊に分けた。それぞれの警戒部隊の長に任命されたのはフランシスコ・ダ・シルヴァとジョアン・デ・ヴァラダーレス、それにフランシスコ・ペレイラである。水夫も別に3つの部隊に分けられ、それぞれの長にはピロットとメストレ、さらにコントラメストレのクストーディオ・ゴンサルヴェスが任ぜられた。兵士へはこれまでにかけ集められた武器、さらにはあの日見つかったその他の武器がしかるべき秩序をもって手渡された。武器の内訳は12本の槍、27丁のエスピングアルダ銃、5丁のモスケーテ銃、それにその他の刀剣や円楯である。

† Repartyo /fol.32/ logo o Capitão Iulião de Faria todo o Arrayal em suas principaes partes, A vanguarda, Corpo da Batalha, & Retroguarda, & destribuyos os soldados em tres partes pera as Vigias, das quaes, se nomearão Capitaens Francisco da Silva, João de Valadares, & Frâncisco Pereira, & dos homens do Mar se fizerão outras⁷⁷ tres, & Capitaens dellas o Piloto, o Mestre, & Custodio Gôçalvez Contramestre. Derãoosse aos soldados com a ordem necessaria as Armas, que se havião recolhido, & outras que aquelle dia se acharão, todas as quaes forão doze Piques, vinte & sette Espingardas, cinco Mosquetes, & Espadas, & Rodelas. †

ヌーノ・ヴェーリョは、これからの長い旅路のためきつと必要になると見越して、砲手へ次のように

⁷⁶ 原語 “Rios de Cuama”. 直訳すれば「クァマの諸河川」であるが、ザンベジ河、ザンベジ・デルタ、およびその溪谷の総称 (Boxer, *The Tragic History of the Sea*, p.124, note 2)。Cf. *O Lyvro de Plantaforma das Fortalezas da Índia da Biblioteca da Fortaleza de São Julião da Barra*, f.49.

⁷⁷ 初版本に “outros” とあるのを正誤表によって訂する。

命じた。火薬はよく精錬してそれを竹筒の中にしまっておくように。竹筒は浜で拾い集めたものが幾つかあるはずだ。ナオでバケツの代用品となっていた竹筒だ。くれぐれも火薬が湿らぬよう竹筒は外側を革で覆っておくように、と。彼はまた次のように命じた。すなわち頭陀袋のような小さな袋を作り、その中には鍋ひとつと、大釜6つから得た銅を物々交換のため小さなかけらに切ってしまうように。また、ナオから取り出したわずかばかりの食糧のため、同じ形の一回り大きな袋も作っておくように、と。

† E anteendo Nuno Velho o que pera tão larga jornada era necessario, mandou aos Bombardeiros, que refinada a Polvora a recolhessem em Bâbuses (que se acharão na praya de algûs, que servirão na Nao de Baldes) os quaes se encourassem por fôra, pera que se não humedecesse. Ordenou que se fizessem saquetes como Alforjes, em que se levas/fol.33/se o Cobre, de hũa Caldeira, & de seis Caldeirões, em pequenos pedaços cortados, pera o resgatte, & outros sacos mayores da mesma feição pera os poucos mantimentos, que se recolherão da Nao. †



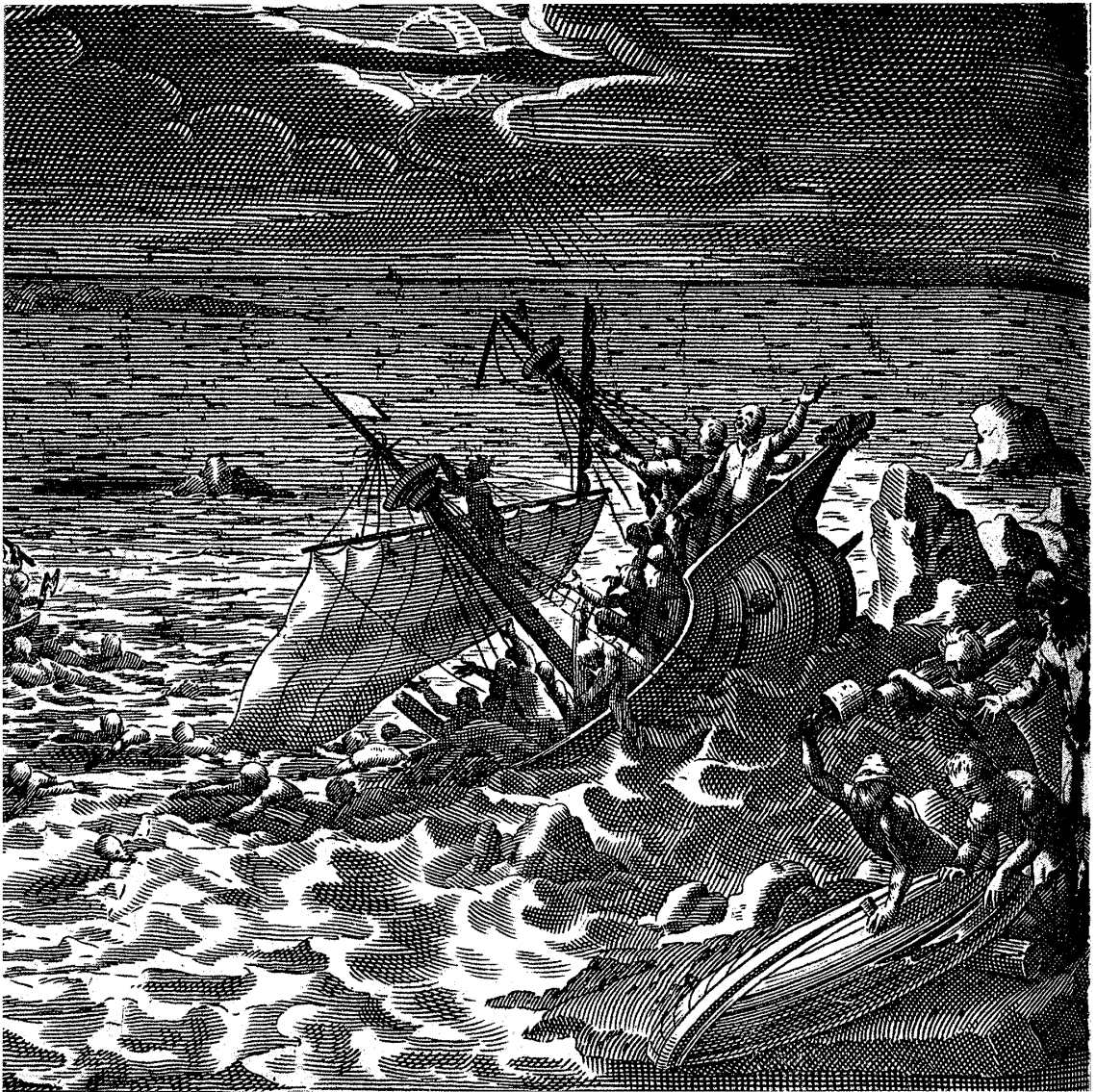
描かれた難船（その5）

キャプションには「ルイ〔・デ〕・メーロ・ダ・カマラ、ナオ船サン・パレーロ号で〔航行中〕スマトラ島にて遭難」（‘Rui de melo da camara que na naõ [nao] são parr[e]lo se perdeo na ilha de c[ç]amatra’）とある。ルイ・メーロ・ダ・カマラはドン・ジョルジェ・デ・ソウザの船隊（1560年）に参加。Livro de Lisuarte de Abreu, fol.77v.

ナオからは上述の文箱と、ヌーノ・ヴェーリオの所有する17個の金製品および27個の銀製品が入った大箱以外、値打ちのあるものは何ら持ち出すことができなかった。これらすべてをヌーノ・ヴェーリオは太っ腹にも配下の兵士への贈り物にしてしまった。このような贈り物が兵士に対して抱くみずから

の厚意の表われとして伝わればそれでよい、と望んだのである。そこで彼は、金銀の製品がプロヴェドール、それにテゾウレイロの手に渡るよう取りはからった。そうすることによって一行がポルトガル人の港へ到着したとき、もしも金銀の製品が残っていれば、その対価を皆で分配するようにしたのである。モサンビークではそのとおり行なわれ、1600 クルザードが皆のあいだで分配された。モサンビークまで持ちつづけた金銀の製品を売りさばいて得たかねが 1600 クルザードなのであった。

† Da qual como se não salvasse outra fazenda, mais que os Escrittorios atras dittos, & o Caixão de Nuno Velho com dezassete peças de Ouro, & vinte & sette de Prata, de todas fez elle aos seus Soldados hum liberal presente, desejando, que se igualara com a vontade com que lho offerecia, & assi mandou entregar as peças ao Prouedor, & Tesoureiro, para que como chegassem á algum Porto nosso, se destrubuisse entre todos o valor, das que sobejassem da jornada, como se fez depois em Moçambique, onde por todos se repartirão mil, & seiscentos cruzados, perque se venderão as que lá chegarão. †



描かれた難船（その6）

ド・ブリ兄弟刊『インディア・オリエンタリス』（1628年）所収の銅版画。Francisco Contente Domingues, *A Carreira da Índia. The India Run*, CTT Correios de Portugal, S. A.より

これらのことをすべて取りはからった後、我らの仲間は水の配給にあずかった。水は黒人の案内で行き違ったふたつの地点で調達してきた。ひとつの水場は浜沿いにある水溜まりであったが、そこには水などほとんどなかった。もうひとつの水場は丘の裏手を流れる小川沿いの水溜まりである。このように水の欠乏がカフラリアの沿岸全域において一般的であり、セルタン〔内陸部〕に泉が乏しいのもそれに劣らず苦痛の種である。しかしながら、あちこちに河が豊かに流れており、おいしい水を湛えている。だから泉の水の乏しさは河の水で補うことができる。

† Depois que todas estas cousas se ordenarão, proverão os Nossos de Agoa, que os Negros mostrarão em dous lugares, hum ao longo da praya, em hũ /fol.34/ charco, no qual havia pouca, e o outro de tras de hũ Môte, em hũas Poças ao lôgo de hũa Ribeira. E he géral esta falta de Agoa em toda a Córta da Cafraria, & não he menor a das Fontes pello Sertaõ, mas tem abundantes Ribeiras, de boas Agoas, com que se escusaõ as das Fontes.

【3月31日】3月の末日、いかなるコースをとるべきかを議論した。票決をとったところ、大半は浜沿いの道をとるべしとの意思を示した。けれどもヌーノ・ヴェーリョは1589年のテラ・ドス・フーモスにおけるナオ船サン・トメ号⁷⁸の難船——ナオのソタピロット⁷⁹、ガスパール・フェレイラが執筆したその顛末に関する記録を、ヌーノ・ヴェーリョはゴアで読んでいた——を想起しそれを教訓として、また、1552年と1554年にそれぞれ遭難したガレアン船サン・ジョアン号⁸⁰とナオ船サン・ベント号⁸¹の難

⁷⁸ ナオ船サン・トメ号の難船記 *Relação do naufrágio da Nau S. Tomé na Terra dos Fumos, no ano de 1589. E dos grandes trabalhos que passou D. Paulo de Lima nas Terras da Cafraria, até sua morte. Escrita por Diogo do Couto guarda-mor da Torre do Tombo. A rogo da Senhora D. Ana de Lima irmã do dito D. Paulo de Lima no ano de 1611* は、ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』に収載されている。この記録はサン・トメ号の難船で一命を落としたドン・パウロ・デ・リマの姉(妹)の懇請により年代記作者ディオゴ・ド・コウトが1611年に執筆したものであるから、ラヴァーニャが参照したものではない。Cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, II, ed. António Sérgio, Lisboa, Editorial Sul, [1956], pp.217-266.

⁷⁹ 原語“Sottapiloto”. Cf. Humberto Leitão & Vicente Lopes, *Dicionário da Linguagem de Marinha Antiga e Actual*, p.355. リンスホーテンは前掲書でソタピロット(和訳書によれば「副操舵長」)の職分を次のように説明する。「副操舵長はもっぱら操舵長を助けて、交替で当直する。つねに2, 3名の優秀な水夫を従えており、操舵長が休息しているときは、これら水夫が操舵長の席で指令する」(『東方案内記』640頁)。

⁸⁰ ポルトガル文学史に名高いガレアン船サン・ジョアン号の難船記 *Relação da mui notável perda do galeão grande S. João em que se contam os grandes trabalhos e lastimosas cousas que aconteceram ao Capitão Manuel de Sousa Sepúlveda e o lamentável fim que ele e sua mulher e filhos, e toda a mais gente, houveram na Terra do Natal, onde se perderam a 24 de Junho de 1552* (『大ガレアン船サン・ジョアン号のいとも名高き難破についての報告。ここでは、カピタンのマヌエル・デ・ソウザ・セプールヴェダの身に降りかかった大いなる苦難と不憫な出来事のかずかず。そして彼とその妻子たち、その他すべての人々がテラ・ド・ナタール——彼らはこの地で1552年6月24日に難破した——で迎えた悲しむべき結末が語られる』)は、16世紀のうちに単独の書物として刊行され、後、ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』に収められた。Cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, I, ed. António Sérgio, Lisboa, Editorial Sul, [1956], pp.9-40. 『海難悲話』所収テキストにもとづく全文試訳は公にされている(日埜博司/小磯京子「ポルトガル大航海時代の裏面史『海難悲話』について(その2)——『大ガレアン船サン・ジョアン号の難船とマヌエル・デ・ソウザ・セプールヴェダの非業の死についての報告』訳注」『流通経済大学論集』通巻121号, 1998年, 39~70頁)。

⁸¹ ナオ船サン・ベント号の難船記 *Relação sumária da viagem que fez Fernão de Álvares Cabral, desde que partiu deste*

船に教訓を得て、次のような見解を開陳した。すなわち、もしも浜沿いの道をとるならば、大いなる苦勞と克服しがたい危険に皆が出遭うであろうし、飢えや渇き、疫病にもさいなまれるであろう、さらにまた、サン・トメ号の遭難者に降りかかった災いをはるかに上回るそれが私たちへ降りかかるであろう、と。そしてそのわけを挙げて、我らの現在地が、上記の遭難地以上に、ロウレンソ・マルケスから遠く隔たっているからだと述べた。ロウレンソ・マルケスは沿海随一の港であり、ポルトガル人はそこで財を商い物々交換を行なう。

xxxi. [31 de Março]

Tratousse ao derradeyro de Março do caminho, que se havia de fazer, & posto que a mayor parte dos votos, foy que se caminhasse ao longo da Córta, lembrado Nuno Velho da perdição da Nao S. Thome na terra dos Fumos o Anno de 89. cujos sucessos lera em Goa escritos por Gaspar Ferreyra Sottapiloto della, mostrou com o seu exemplo, & com o do Galeão S. João, & Nao S. Bento, que naquellas partes se perderão os Annos de 52. & 54. os grãdes trabalhos, & dificultosos perigos em que todos encorrerão, & infirmitades⁸² que passarião costeando a Cafraria, & que serão os seus males muito mayores, por ser mayor a distancia do lugar, em que estavam ao Rio de Lourenço Mar/fol.35/ques primeiro Porto daquela Córta, em que os Portugueses trattão, & resgattão. †

一同、上述の的を射た説明に服して考えを変更した。その説明が実際に的を射たものであることは、後に経験が示したとおりだ。全員の同意によって、内陸のコースをとり、そうして浜辺を通ることによって確実に降りかかるであろう難儀を避けることが決定された。右のことに決着がつき、どのように隊列を組むべきか、人員の部署割がカピタンによって行なわれ、兵士たちに対しては守備すべき部署が指定された。そうしたとき、我らの一行を一度訪ねたことのある例のアンコセがやってきた。そこでヌーノ・ヴェーリョはこれに対し、我らの道中案内をし、かつ貴殿の隣人であるもうひとりのアンコセのもとへ我らを連れていってくれるガイドを数名貸してもらえないだろうか、と頼んだ。アンコセはそうしようと約束し、出発時にこれを送り届けた。

† Mudarão todos de parecer, cõ este acertado (como o mostrou depois a experiencia), pello que de commũ consentimento se resolveo que se fizesse o caminho pella terra dentro, & se fogisse dos trabalhos certos da Praya. O que assentado, & repartida a Gente, pello Capitão, como havia de caminhar, & aos Soldados assinalados as stanças, que devião goardar. Veo o mesmo Ancosse, que os havia visitado, & pedindolhe Nuno Velho Guias, pera que os encaminhassem, & levassem á outro Ancosse seu vezinho, elle lhas prometeo, & enviou ao tempo da partida. †

出発を控えてカピタン・モールは次のように命じた。翌日、すなわち4月1日の出発に向け、総員準備おさおさ怠りなきように、と。その夜、偽の警報が鳴らされたが、そうした警報にもわが兵士たちは真剣にかつ整然と武器を携えて馳せつけ、みずからに指定された部署を固めた。

† Pera a qual mãdou o Capitão mór que ao outro dia, primeiro de Abril, se aprestassem todos, & naquella route

Reino por capitão-mor da armada que foi no ano de 1553 às partes da Índia até que se perdeu no Cabo de Boa Esperança no ano de 1554. Escrita por Manuel de Mesquita Perestrelo que se achou no dito naufrágio もまた、ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』に収載される。Cf. *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, I, pp.41-126.

⁸² 初版本の正誤表によって“infirmitades”の前に“& as fomes, sedes”という語句を追加する。

se deu hũ rebate falso, a que cõ muita diligencia, & acordo acodirão os Nossos Soldados cõ suas Armas, & se poserão em seus ordenados lugares. †

（この稿，続く）



描かれた難船（その 7）

ド・ブリ兄弟刊『インディア・オリエンタリス』（1628 年）所収の銅版画。テルセイラ島の近くで嵐に襲われる人々。
Francisco Contente Domingues, *A Carreira da Índia. The India Run*, CTT Correios de Portugal, S. A. より